

六波羅政庁跡・京焼窯跡（井野祝峰窯）

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

六波羅政庁跡・京焼窯跡（井野祝峰窯）

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をととして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、宿泊施設新設に伴う六波羅政庁跡・京焼窯跡（井野祝峰窯）の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成30年5月

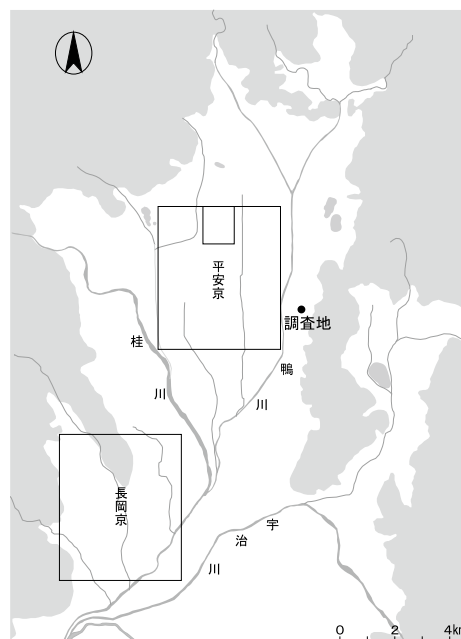
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | | |
|----|---------|---|
| 1 | 遺 跡 名 | 六波羅政庁跡・京焼窯跡（井野祝峰窯）（京都市番号 17 S 481） |
| 2 | 調査所在地 | 京都市東山区建仁寺町五条下る一丁目東入芳野町 |
| 3 | 委 託 者 | （株）キヨロク 代表取締役 清水六兵衛 |
| 4 | 調 査 期 間 | 2017年11月21日～2017年12月14日 |
| 5 | 調 査 面 積 | 80㎡ |
| 6 | 調査担当者 | 木下保明 |
| 7 | 使 用 地 図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。 |
| 8 | 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 | 使用 標 高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 | 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 | 遺 物 番 号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 12 | 本 書 作 成 | 木下保明 |
| 13 | 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員が当たった。 |

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	4
(1) 遺構の概要	4
(2) 基本層序	4
(3) 七兵衛窯	4
(4) 大正窯	8
(5) 旧窯	9
(6) 新窯	9
4. 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
(2) 土器類	10
(3) 窯道具	12
(4) 窯壁材	17
(5) その他の遺物	18
(6) 刻印	19
5. ま と め	20

図 版 目 次

図版1	遺構	新窯オルソ画像（1：60）
図版2	遺構	新窯断面見通しオルソ画像（1：60）
図版3	遺構	新窯平面図（1：50）
図版4	遺構	1 新窯全景（西から） 2 旧窯・大正窯北側壁基底部（西から） 3 旧窯南側壁基底部（西から）
図版5	遺構	1 調査区1全景（北から） 2 調査区2全景（北から）

- 図版 6 遺構 1 新窯三の間奥隔壁及び旧窯五の間奥隔壁（北西から）
 2 大正窯四の間 奥隔壁基底部（北から）
 3 大正窯胴木間 内部裾（東から）
 4 大正窯四の間 前隔壁基底部上半（東から）
 5 大正窯四の間 前隔壁基底部下半（西から）
- 図版 7 遺物 窯道具・窯壁材・瓦・土製品・木製品
- 図版 8 遺物 1 窯道具
 2 井野祝峰窯伝世窯道具

挿 図 目 次

図 1	調査地位置図（1：2,500）	1
図 2	調査区配置図（1：300）	2
図 3	調査前全景（北東から）	2
図 4	作業風景（北西から）	2
図 5	遺構平面図（1：60）	5
図 6	調査区 1 実測図（1：40）	6
図 7	調査区 2 実測図（1：40）	7
図 8	調査区 3 実測図（1：40）	8
図 9	旧窯床面断面図（1：60）	9
図 10	土器類実測図（1：4）	11
図 11	匣鉢実測図 1（1：4）	13
図 12	匣鉢実測図 2（1：4）	14
図 13	窯道具実測図（1：4）	15
図 14	塼（レンガ）・クレ拓影及び実測図（1：6）	16
図 15	耐火レンガ拓影（1：4）	17
図 16	その他の遺物実測図（1：4）	18
図 17	刻印拓影（1：2）	19

表 目 次

表 1	遺構概要表	4
表 2	遺物概要表	10
表 3	窯の寸法表	20
表 4	土器類観察表	22
表 5	窯業関連遺物観察表	22
表 6	その他の遺物観察表	24
表 7	刻印観察表	24

六波羅政庁跡・京焼窯跡（井野祝峰窯）

1. 調査経過

（1）調査に至る経緯

本調査は、宿泊施設新設に伴って実施した発掘調査である。調査地は、東大路五条交差点より約150m西に入った南側に位置する。周辺は「五条坂」と呼ばれ、窯業地帯（清水焼の生産）であった。調査地の敷地内に残る1971年に築かれた窯（井野祝峰窯）は、現存する5基の京式登り窯の一つである。

この窯が開発により取り壊されることになった。京式登り窯の伝統を受け継いだ近・現代の産業遺産として貴重な遺構であるため、現状の記録と窯の変遷を追うために調査区を設定して、下層の確認調査を実施した。また、調査地は平安時代後期に平氏の六波羅邸があり、平氏滅亡後、鎌倉幕府により六波羅政庁が設けられた所に当たっており、関連の遺構・遺物の検出も想定された。調査を実施するにあたって、京都市文化市民局文化芸術推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の指導を受けた。

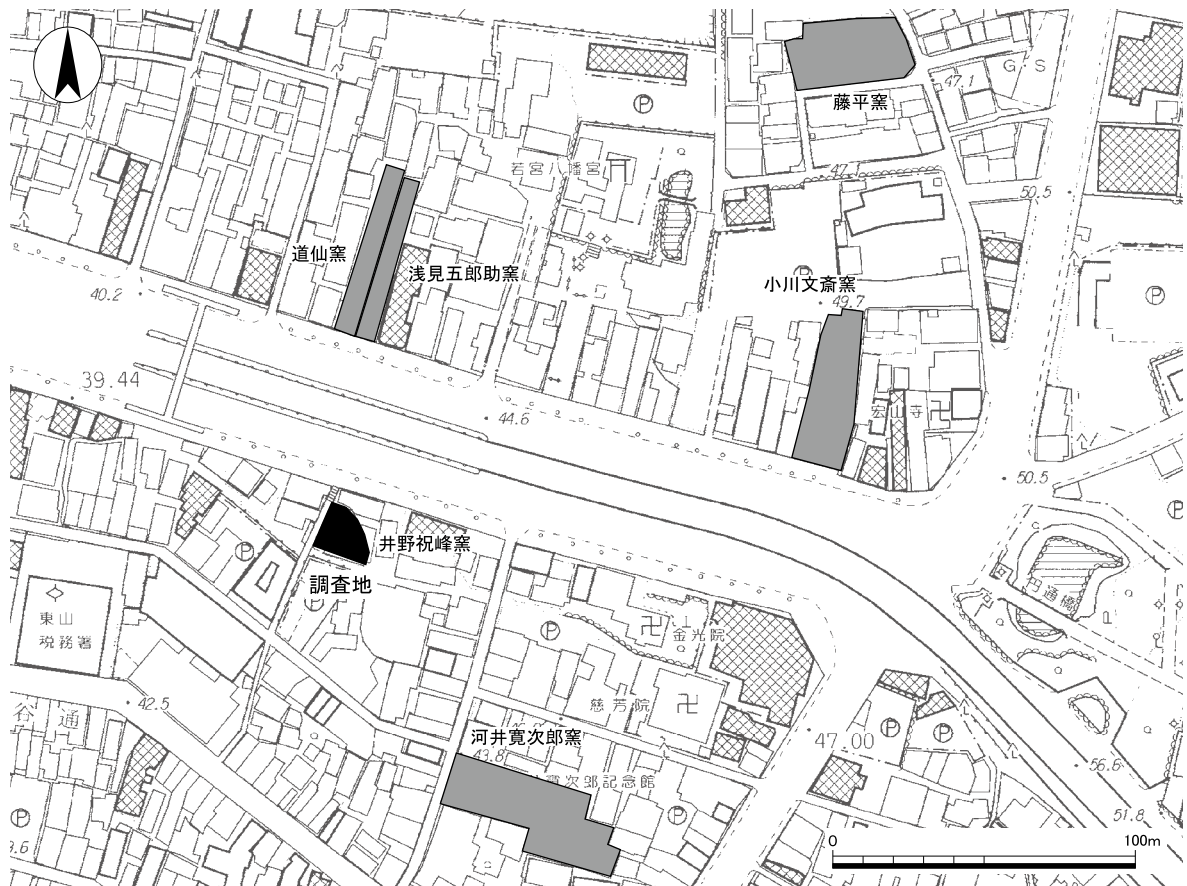


図1 調査地位置図（1：2,500）

(2) 調査の経過

調査に先立ち、立命館大学の木立雅朗教授、文化財保護課、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が現地で、調査方法・調査区の設定場所など調査方針を協議した。

調査は、窯の現状を記録するために、最初に窯とその周辺、胴木間・一の間・二の間・三の間の内部のレーザー測量、全景写真撮影から実施した。次に、下層遺構を確認するために、胴木間前(調査区1)、二の間の床面を断割る南北のトレンチ(調査区2)、窯の周辺の発掘調査を行った。調査区2の発掘調査を始める前に、作業の安全を確保するために二の間の天井部を取り外した。また、二の間の奥隔壁の構築の変遷を調査するために、窯の窯壁を取り外し、調査区3を設定した。2015年の立命館大学の調査で、現存する窯は既存の窯を縮小して造られていることが確認されているので、窯本体と関係のない¹⁾ 塼(レンガ)を取り除き、旧来の窯基底部の検出を目的とした。

調査は2017年11月21日に開始し、同年12月14日に終了した。調査面積は、レーザー測量を実施した部分を含めて約80㎡である。

調査中は、適宜、文化財保護課の臨検を受けた。また、立命館大学の木立雅朗教授の視察を3回受け、窯の調査方法などのご教示を得た。

註

1) 参考文献9・10

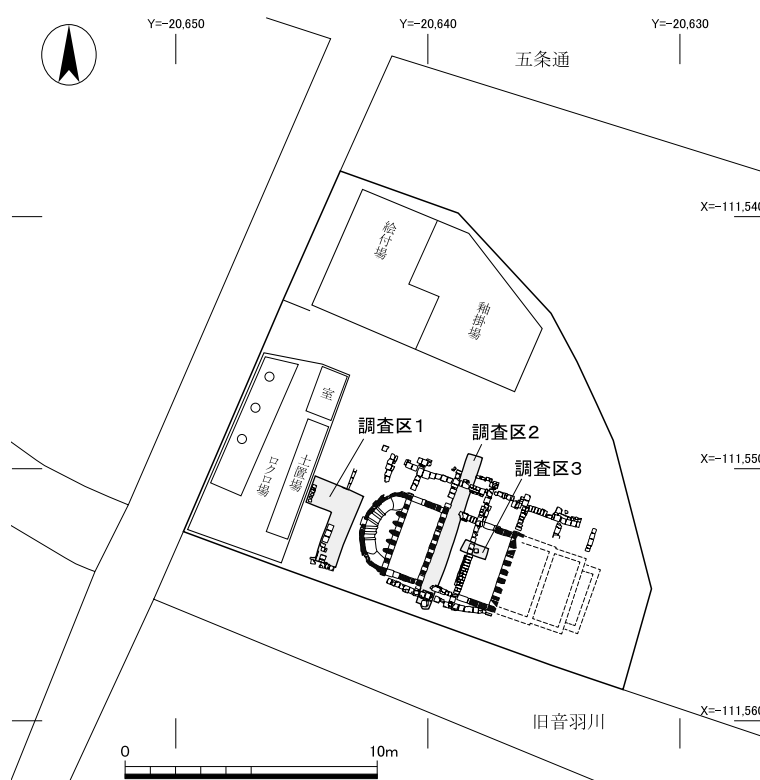


図2 調査区配置図(1:300)



図3 調査前全景(北東から)



図4 作業風景(北西から)

2. 位置と環境

五条通の大和大路通から東大路通に向かう緩やかな坂道が五条坂と呼ばれ、清水寺の参詣道として賑わっている。五条通は現在50m幅の幹線道路であるが、これは昭和19年（1944）の強制疎開によって南側に拡張されたものである。それ以前は6m程の道で、道の両側には陶磁器の小売店が立ち並んでいた。また、西には奈良へと向かう大和街道、京都と伏見を繋ぐ伏見街道（本町通）がある。調査地は五条坂に面し、東大路より約150m西に入った南側に位置する。窯は、敷地内の現五条通より一段低くなった場所に築かれている。南側は旧音羽川が西流していたが、現在は暗渠となり谷地形を残すのみとなっている。

周辺は、いわゆる京焼・清水焼製造の中心地であり、かつて多くの登り窯が存在していた。五条坂で、窯業が開始されるのは、音羽屋惣佐衛門が陶祖椎根津彦命を祭神とする若宮八幡宮社（陶器神社）の門前、音羽橋のあたりに寛永18年（1641）に窯を開いてからである。当初は、音羽川を挟んで窯が点在しており、製品は「音羽焼」とよばれていた。以来、五条坂では窯業が発展し、大正期には約20基の登り窯が操業していたと伝えられている。しかし、昭和46年（1971）に京都府公害防止条例の施行により、登り窯による操業はできなくなった。

今回調査した井野祝峰窯は、現存する5基の京式登り窯¹⁾（藤平窯・河井寛次郎窯・小川文斎窯・浅見五郎助窯・井野祝峰窯）のうちの一つで、昭和46年（1971）に築き直された窯であるが、同年施行された京都府公害防止条例により一度も操業されることなく現在に至っている。井野祝峰窯は、元来、幕末に二代目清水六兵衛の長男清水七兵衛が開いた窯である。明治15年（1882）頃には山村長山が所有、年代は不詳だが次に山本龍山の所有となった。明治31年（1898）に三代目清風与平へと所有者が移り、昭和24年（1949）二代目井野祝峰が所有することになった。

調査の結果、大正期の清風与平窯、1971年までの井野祝峰窯の窯壁の基底部を検出したが、幕末に築かれた窯は検出することはできなかった。

註

- 1) その他、窯屋が崩壊しているが基礎部分が保存されている入江道仙（化学製陶所）窯があり、立命館大学によって調査が実施されている（参考文献4～6）。

3. 遺 構

(1) 遺構の概要（表1）

3箇所での断割りと窯周辺の調査により、築窯時の造成土、大正期の清風与平窯と1971年までの井野祝峰窯の造成土・窯壁の基底部を検出した。それにより、当地における京式登り窯の変遷の一端を明らかにすることができた。調査時に現存した登り窯を「新窯」、調査で検出した1971年までの井野祝峰窯を「旧窯」、大正期の清風与平窯を「大正窯」、幕末に築かれた窯を「七兵衛窯」と仮に呼称し概要を述べる。

(2) 基本層序（図6・7）

基本層序は、現代層が薄く堆積し、大正窯・旧窯の床面が4～6層重なった厚さ15～20cmの層が堆積する。調査区1では、次に礫・焼土・土器類と窯道具類を含む旧窯の窯床を構築したみられる層（第Ⅰ層）が堆積し、その下に比較的固く締まった整地層と思われる灰褐色細砂層（図6の18層）を確認した。整地層の下は二代目清水六兵衛の刻印をもつ椀などの幕末の土器類と窯道具類を多量に含む造成土（第Ⅱ・Ⅲ層）で、「七兵衛窯」を構築するためのものと考えられる。地表下約1.4m（標高39m）で、窯造成時の地面と考えられる黄褐色シルト（第Ⅳ層）となる。

調査区2では、窯本体部分の基本層序は、調査区1同様に大正窯・旧窯の床面が検出され、次に礫・焼土・土器類と窯道具類を含む旧窯の窯床を構築したとみられる層（第Ⅰ層）が堆積している。窯本体の構築が終わってから、南北の外側に新たに整地土が積み重ねられている（窯外整地土）。大正窯・旧窯の整地土の下は「七兵衛窯」を構築するための造成土（第Ⅱ・Ⅲ層）となる。地表下1.6m（標高40.2m）まで掘削したが、造成土の検出にとどまり、旧地表を検出することはできなかった。

(3) 七兵衛窯

窯体部は検出できなかったが、築窯以前の造成の跡を確認した。窯は旧音羽川の北岸の比較的起伏の少ない地に、流れと平行に築かれているため、傾斜地を造る必要があったので造成工事が行わ

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代後期～幕末	清水七兵衛窯の造成土	
明治40年～昭和24年	大正窯（清風与平窯）	
昭和24年～昭和46年	旧窯（井野祝峰窯）	
昭和46年～	新窯	

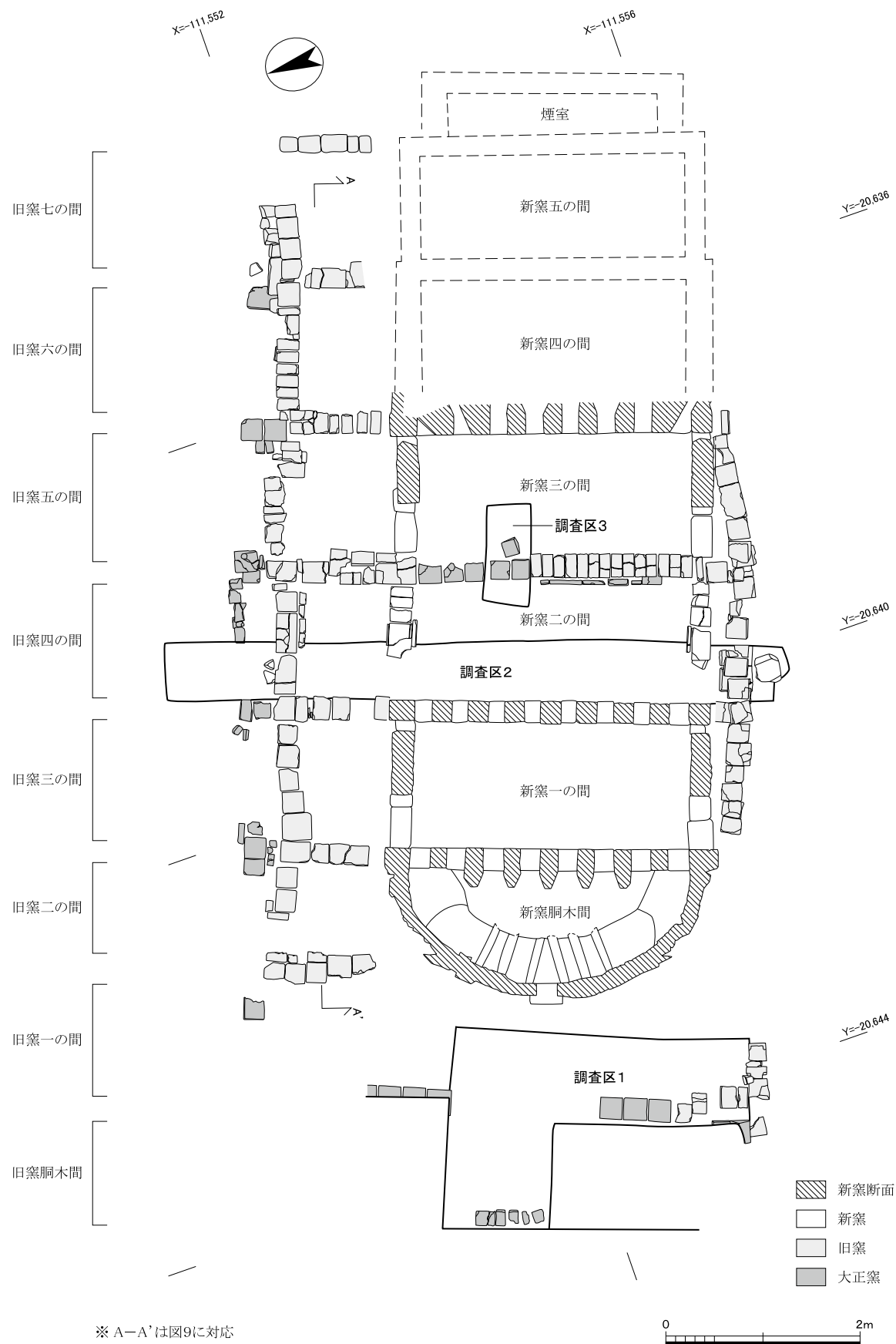
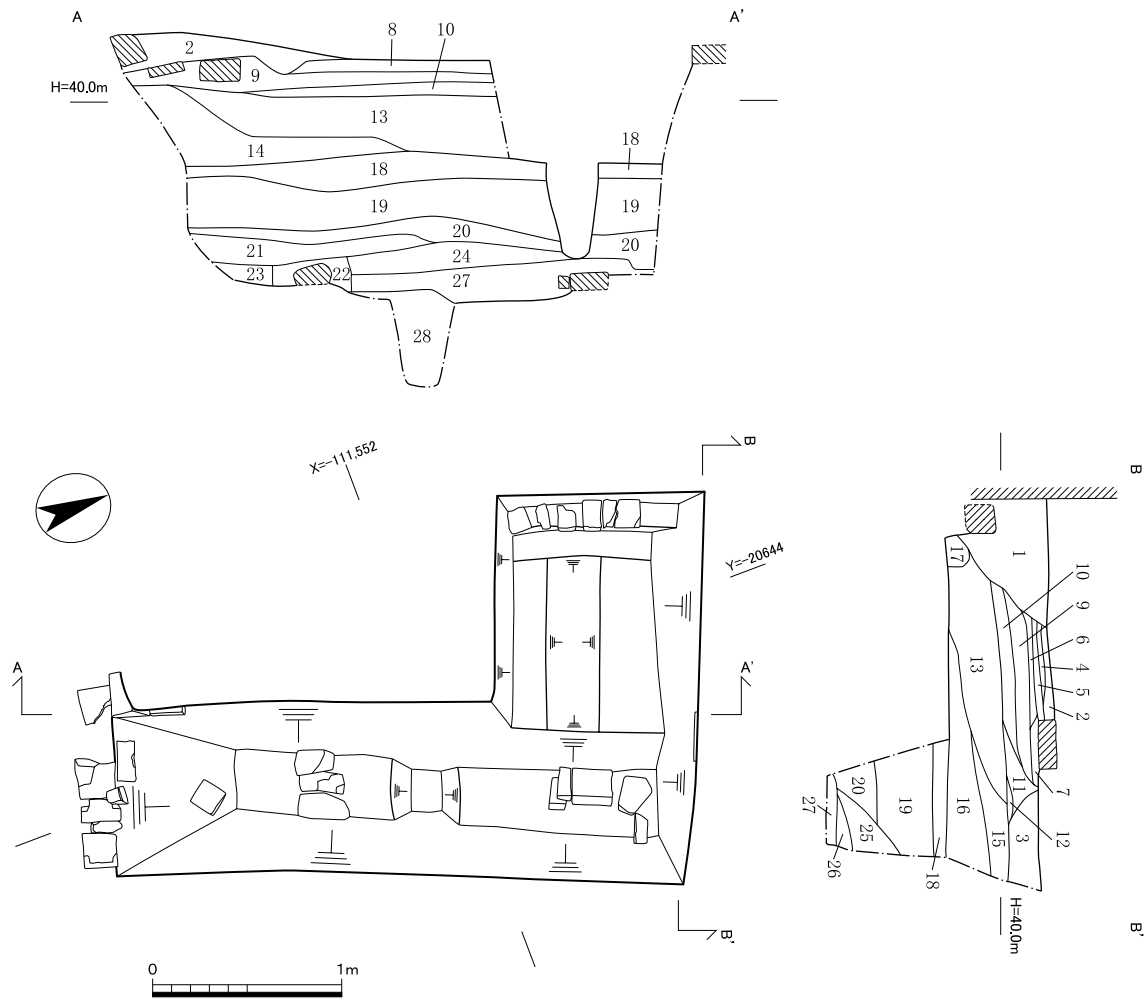
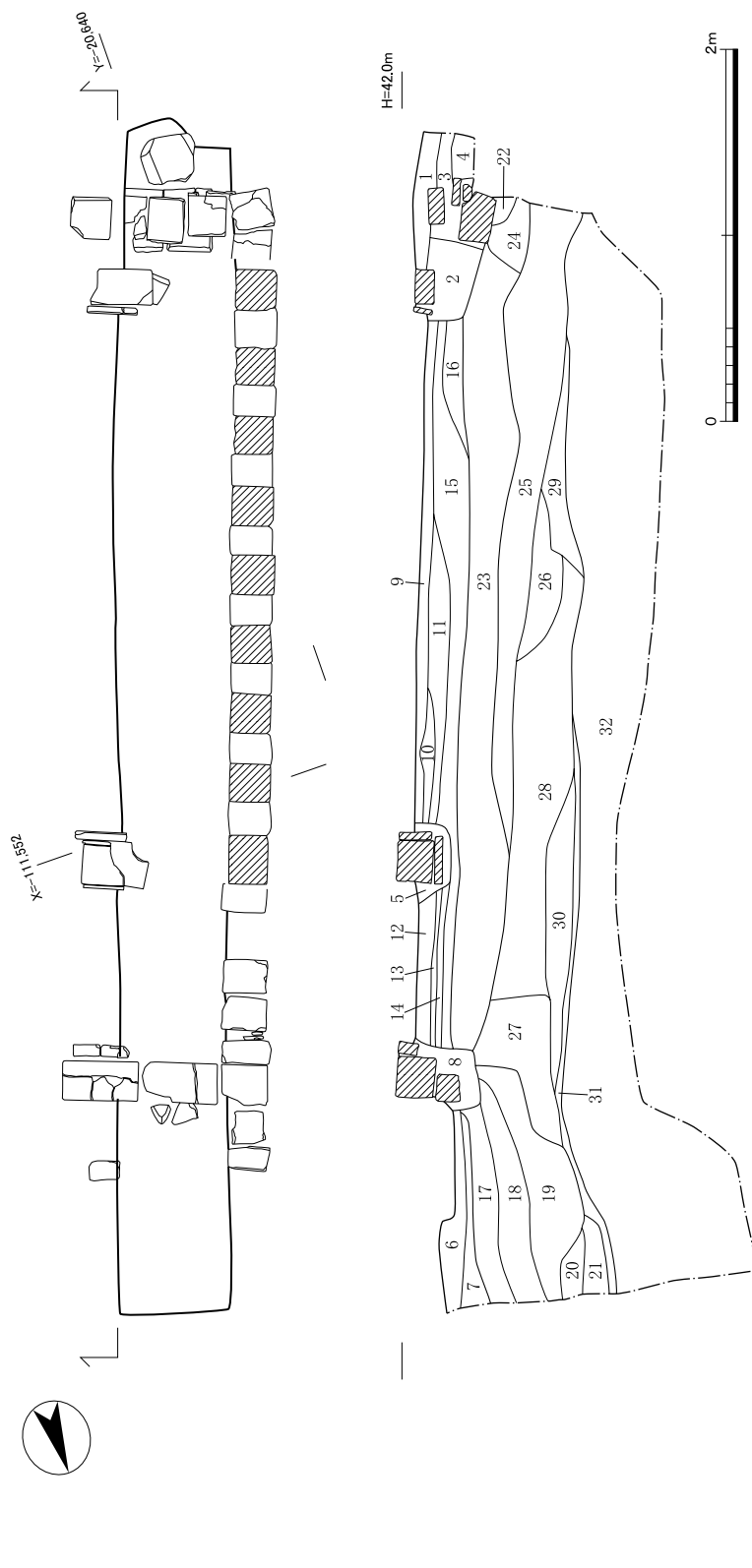


図5 遺構平面図 (1 : 60)



- | | | |
|----|-----------------------------------|-------------|
| 1 | 7.5YR5/4にぶい黄褐色細砂 レンガ片・遺物多量含む | |
| 2 | 7.5YR3/3暗褐色細砂 | |
| 3 | 7.5YR4/3褐色細砂 遺物含む | |
| 4 | 7.5YR4/6褐色細砂 | |
| 5 | 7.5YR5/8明褐色細砂 | |
| 6 | 2.5Y8/2灰白色細砂 | |
| 7 | 7.5YR5/4にぶい褐色細砂 | (窯床) |
| 8 | 7.5YR4/4褐色細砂 礫含む | |
| 9 | 5YR5/6明赤褐色細砂 | |
| 10 | 5YR4/4にぶい赤褐色細砂 | |
| 11 | 7.5YR4/6褐色細砂 ϕ 2~4cmの礫少量含む | |
| 12 | 7.5YR4/2灰褐色細砂 | |
| 13 | 7.5YR5/4にぶい褐色細砂 ϕ 7~12cmの礫含む | (第I層) |
| 14 | 5YR3/3暗赤褐色細砂~中砂 遺物・礫多量含む | |
| 15 | 7.5YR4/2灰褐色細砂 ϕ 2~3cmの礫含む | |
| 16 | 7.5YR3/1黒褐色細砂 遺物多量含む | |
| 17 | 7.5YR4/3褐色細砂~中砂 被熱 | |
| 18 | 7.5YR4/2灰褐色細砂、やや硬い | (整地層) |
| 19 | 7.5YR4/3褐色細砂~中砂 礫多量含む | (造成土、第II層) |
| 20 | 7.5YR5/3にぶい褐色シルト質細砂 | |
| | 7.5YR8/1灰白色のブロック含む | |
| 21 | 7.5YR5/3にぶい褐色細砂~中砂 遺物多量含む | |
| 22 | 7.5YR4/2灰褐色シルト質細砂、固く締まる | |
| 23 | 7.5YR5/2灰褐色シルト質細砂、固く締まる | (造成土、第III層) |
| 24 | 7.5YR4/3褐色シルト質細砂、固く締まる | |
| 25 | 7.5YR4/2灰褐色細砂、固く締まる 礫含む | |
| 26 | 7.5YR8/2灰白色粘土 レンガ片含む | |
| 27 | 10YR4/2灰黄褐色シルト、固く締まる | |
| 28 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルト、固く締まる | (第IV層) |

図6 調査区1実測図(1:40)



- | | | | |
|----------------------------|-----------------------------|----------------------------------|-----------|
| 1 10YR5/3にぶい黄褐色細砂 礫含む | 13 上層:5YR5/6明赤褐色細砂 遺物・礫含む | 22 10YR6/6明黄褐色細砂 10YR8/2灰白色のブロック | (第Ⅰ層) |
| 2 7.5YR6/4にぶい橙色細砂 | 下層:5YR6/4にぶい橙色細砂 | 含む | |
| 3 7.5YR6/3にぶい橙色細砂、固く締まる | 14 上層:5YR5/6明赤褐色細砂 遺物・礫含む | 23 5YR4/8赤褐色細砂 レンガ片・φ3~7cmの礫含む | |
| 4 10YR6/3にぶい黄褐色細砂 木片含む | 下層:5YR6/4にぶい橙色細砂 | 24 7.5YR4/4褐色細砂〜中砂 φ3cm以下の礫含む | |
| 5 10YR6/3にぶい黄褐色細砂 | 15 5YR5/4にぶい赤褐色細砂〜中砂 | 25 10YR5/6黄褐色細砂〜中砂 φ3cm以下の礫含む | |
| 6 10YR4/4褐色細砂、固く締まる | 陶器片・φ1cm以下の礫含む | 26 10YR4/4褐色細砂 遺物多量含む | |
| 7 10YR6/3にぶい黄褐色細砂 遺物・礫多量含む | 16 上層:7.5YR6/4にぶい橙色細砂 | 27 10YR5/4にぶい黄褐色細砂〜中砂 | |
| 8 10YR6/3にぶい黄褐色細砂 | 下層:7.5YR5/4にぶい褐色細砂 陶器片・礫含む | 28 10YR5/6黄褐色細砂〜中砂 φ5~7cmの礫多量含む | (造成土、第Ⅱ層) |
| 9 上層:5YR5/6明赤褐色細砂 | 17 10YR4/6褐色細砂 礫含む | 29 10YR4/6褐色細砂 遺物多量含む | |
| 下層:5YR6/4にぶい橙色細砂 | 18 10YR4/4褐色細砂、固く締まる 礫少量含む | 30 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 礫含む | |
| 10 10YR6/4にぶい黄褐色細砂 礫多量含む | 19 10YR5/4にぶい黄褐色中砂 礫多量含む | 31 10YR4/6褐色細砂 | (窓外整地土) |
| 11 5YR6/6橙色細砂 レンガ片・礫多量含む | 20 10YR5/4にぶい黄褐色細砂〜中砂、固く締まる | 32 10YR3/4暗褐色細砂 遺物多量含む | (造成土、第Ⅲ層) |
| 12 7.5YR5/3にぶい褐色細砂 | 21 10YR5/3にぶい黄褐色中砂、やや硬い | | |

図7 調査区2実測図 (1:40)

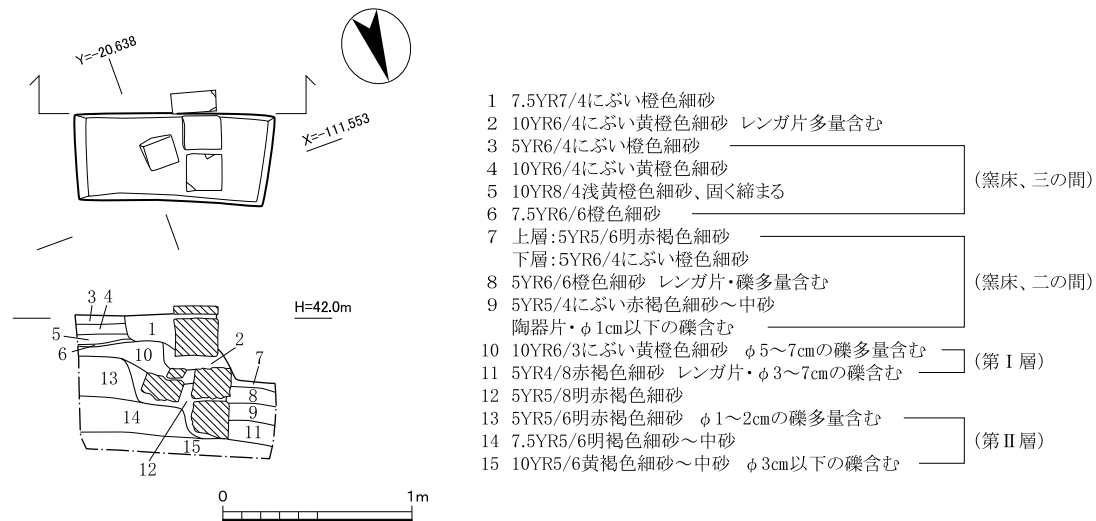


図8 調査区3実測図 (1:40)

れたと考えられる。登り窯の焚口(胴木間)が西に築かれているため、造成土の堆積は東の方に厚くなる。また、窯の本体部の造成が厚く、南北両側は造成が薄くなっていく。造成土は調査区1で厚さ約0.6m、調査区2で厚さ約0.8m以上堆積している。造成土の中には、江戸時代後期から幕末の土器類と窯道具類が多量に含まれ、明治以降のものは出土しなかったことから、七兵衛窯築窯のための造成土であると考えられる。遺物の中に清水七兵衛の父である二代目清水六兵衛の銘款(二重六角の中に清)が刻印されたものがあり、近くで操業していた二代目清水六兵衛窯の廃棄物・焼成不良品を造成土のなかに混ぜ込んだものと思われる。

(4) 大正窯

大正窯は、七兵衛窯を取り壊した後に構築されたものと思われる。最初に、窯本体部分の造成が行われ、窯の両側は後から整地されている。約15°の傾斜(ほぼ、3寸勾配の傾斜)をもつ造成土を階段状に削り出し各焼成室の床面を作り出している。次に、床の前端(下方面)を削って隔壁を構築している。隔壁の構築後、両側壁を設ける。窯壁は基底部のみの検出で、使用されている部材は、方形の磚(レンガ)を2～4枚平積みし、固まったものを一つのブロック(オオゲタ)として使用したものである。大正窯以前の窯壁を再利用したものと考えられ、表面は高熱により融解しガラス化している。旧窯四の間前隔壁では、上下2段に積まれ、下段はレンガの側面が縦積になるように揃えて据えてある(図版6-5)。上段は磚(レンガ)ブロックを小口積みと平積みを併用して構築されている(図版6-4)。この基底部の上に窯壁を構築していたと考えられる。レンガには、山型に「清」・「七」の刻印が多くみられ、「清」・「七」は清水七兵衛に係る可能性がある。その場合、清水七兵衛の築いた窯は完全に取り壊され、その窯壁の構築材が大正窯の基底部に使用されたと考えられる。

また、調査区1の西への下がり、表面は削平を受けているが胴木間内部の奥壁と考えられ、京式登り窯では胴木間が各焼成室より一段低い所に設置される状況と符合する。最下段(図6-17

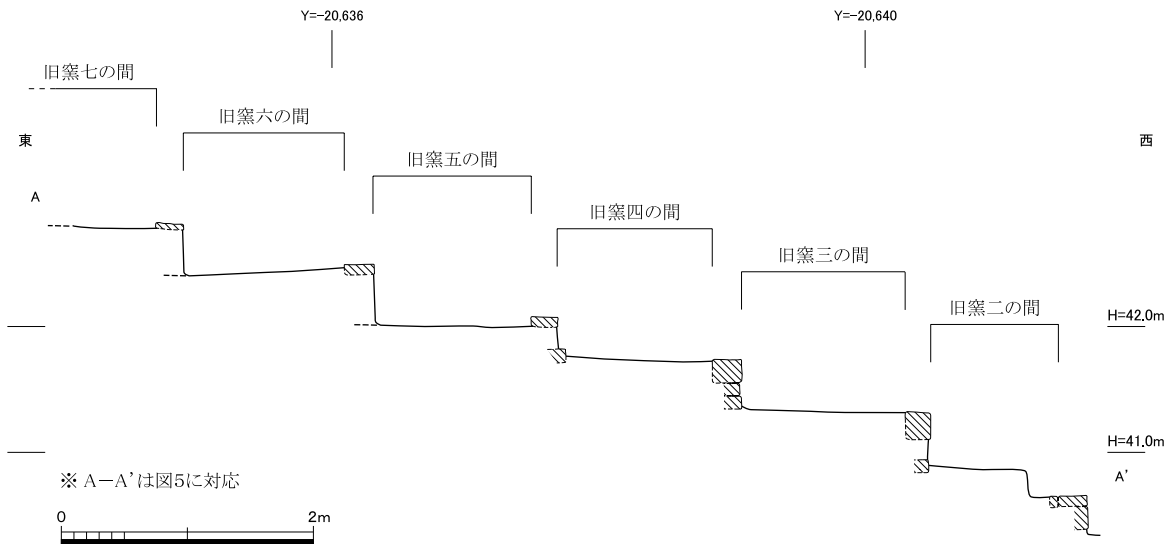


図9 旧窯床面断面図（1：60）

層）は被熱して赤色を呈しており、その外側に円柱形の材が並べてある（図版6－3）。この円柱形の材は、ほぼ直角に立ち上がった奥壁が斜めに傾斜する変換点に置かれた可能性が考えられる。

（5）旧窯

旧窯は、東西の隔壁の位置は大正窯をほぼ踏襲しており、奥行の規模は変わらないが、南北の側壁は規模を減じて新しく構築されている。ただし、窯の軸方向は大正窯より若干南に傾いている。隔壁は大正窯の基底部を残して窯壁を取り壊した後、再構築されている。その際、大正窯の窯壁を旧窯の基底部に再利用している。基底部の上に「BIZEN-INBE」と刻印された耐火レンガが小口平積みされている。その他、数種の刻印をもつ耐火レンガを採集しており、それぞれ隔壁に使用されていたと考えられる。南北の幅は北側で約0.35m、南側は0.25m縮小している。隔壁の表面には粘土が2～3mm塗られ、窯の操業によって硬化し茶褐色を呈している。

（6）新窯（図版1～3）

現存する窯で、1971年に旧窯の焼成室の規模を縮小して造られたものである。胴木間から三の間までは新しく造り直しているが、三の間奥から後の隔壁は縮小した部分を削り、残りの隔壁としてそのまま利用している。旧窯の操業により、三の間までの破損が激しく、造り直さねばならなかったが、保存状態の良かった四の間からは旧来の壁を再利用したと考えられる。基底部は旧窯のものを再利用し、狭間から築き直している。方形、長方形、方柱の新しい耐火レンガと使用済みの窯壁を組み合わせて壁を築いている。また、京式登り窯の天井部は「クレ」と呼ばれる円筒形のレンガで構築されるが、「クレ」を使用しているのは胴木間の天井部のみで、他の天井部は方形のレンガをアーチ状に積んで構築している。この窯も隔壁から天井部を構築し、最後に側壁を造っている。胴木間内部は上下に別れ、中間に円柱形のロストル6本が放射状に設置されている。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

今回の調査では整理箱で20箱の遺物が出土した。出土した遺物には土器・陶磁器類、土製品、瓦類、銭貨、窯業関連遺物、塼、レンガなどの種類がある。また、出土品ではないが井野祝峰窯で使用された窯業関連遺物が伝世されており、あわせて参考品として図示した。遺物の大半が陶磁器類・窯業関連遺物が占め、方広寺で使用されたと思われる桐文軒丸瓦を除いて、時代は江戸時代後期から幕末以降のものである。

江戸時代後期から幕末の遺物の大半は、七兵衛窯築窯時の造成土から出土しているが、上層からの出土数も多い。土師器の皿、土師質土器の碗・皿・急須・土瓶・行平鍋・鍋・壺・蓋、施釉陶器の碗・皿・鉢・急須・土瓶・行平鍋・鍋・壺・蓋、染付の碗、窯業関連遺物の窯道具（匣鉢・トチン・ハマ・ピン・棚板・ツク）、窯の窯壁材として使用された塼（レンガ）、土製品の人形・土型、銭貨の寛永通寶、瓦質土器、瓦、蜆・蛤の貝殻などがある。

大正時代以降の遺物は、窯の周辺と大正窯と旧窯の造成土から出土している。ほとんどが窯業関連遺物である。窯道具（匣鉢・トチン・ハマ・ピン）、窯の窯壁材として使用された耐火レンガなどがある。旧窯で焼成されたとわかるものには碇子^{がいし}がある。また、井野祝峰窯で使用されたシッタ（水挽き乾燥した作品を伏せて、高台などを削り出すための道具）、木製品がある。

(2) 土器類（図10、表4）

土師質土器（1～4） 1は台付の隅丸の角皿である。高台には台形の切欠きが4箇所ある。外面に鉄釉で花が描かれている。ロクロ成形で、体部下半・高台は回転ヘラケズリを施す。2は燈火具の芯抑えである。棒状の粘土で輪を作り、一端を直立させる。全体に鉄釉をかけるものもある。3は台付鉢の底部と考えられる。内面にヘラによる溝状の切込みが入れられる。ロクロ成形で、体

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
桃山時代	瓦		瓦 2 点		
江戸時代後期～幕末	土師器、土師質土器、瓦質土器、施釉陶器、染付、磁器、土製品、瓦、銭貨、窯道具、レンガ		土師質土器 8 点、施釉陶器 15 点、染付 1 点、窯道具 23 点、塼(レンガ) 7 点、土製品 3 点		
大正～昭和	窯道具、レンガ、土製品、木製品		窯道具 10 点、レンガ 8 点、土製品 1 点、木製品 1 点		
合 計		27箱	79点（7箱）	0 箱	20箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より7箱多くなっている。

部下半と高台は回転ヘラケズリを施す。体部下半に「二重六角の中に清」が刻印されている。

4は急須の蓋である。子房を模したつまみの周りに8葉の花弁を配する。押し型による成形で、裏面に指オサエの痕跡が残る。

施釉陶器（5～17） 5は薄い円盤の上に紐状のつまみが付く急須の蓋である。手捏ねで成形している。蓮月焼風の手捏ねの急須の蓋になる可能性がある。6は扁平な宝珠つまみをもつ急須の蓋である。天井部に釉がかかる。7は灯明皿で、口縁外面に煤が付着する。口縁端部・内面に施釉する。底部内面に3箇所の目跡が残る。体部外面・底部は回転ヘラケズリを施す。8・9は印花文を施した三島手の施釉陶器である。8は小型の皿、9は小型の椀である。外面は刷毛で白色の釉を塗っている。ロクロ成形で、高台は削り出している。8の高台部内面に二代目清水六兵衛の落款が刻印されている。9は体部外面に刻印があるが、判読できない。10は型押し成形による椀である。内面に型押しを行った時のナデの跡が残り、口縁はヘラケズリを施す。体部下半・高台以外に施釉されるが、口縁部内面の一部に無釉の部分がある。体部には丸に花卉文が6箇所、体部下半には雷文が表される。11は口縁部が隅丸方形になる椀である。高台部を除き全体に灰釉が施され、白く釉

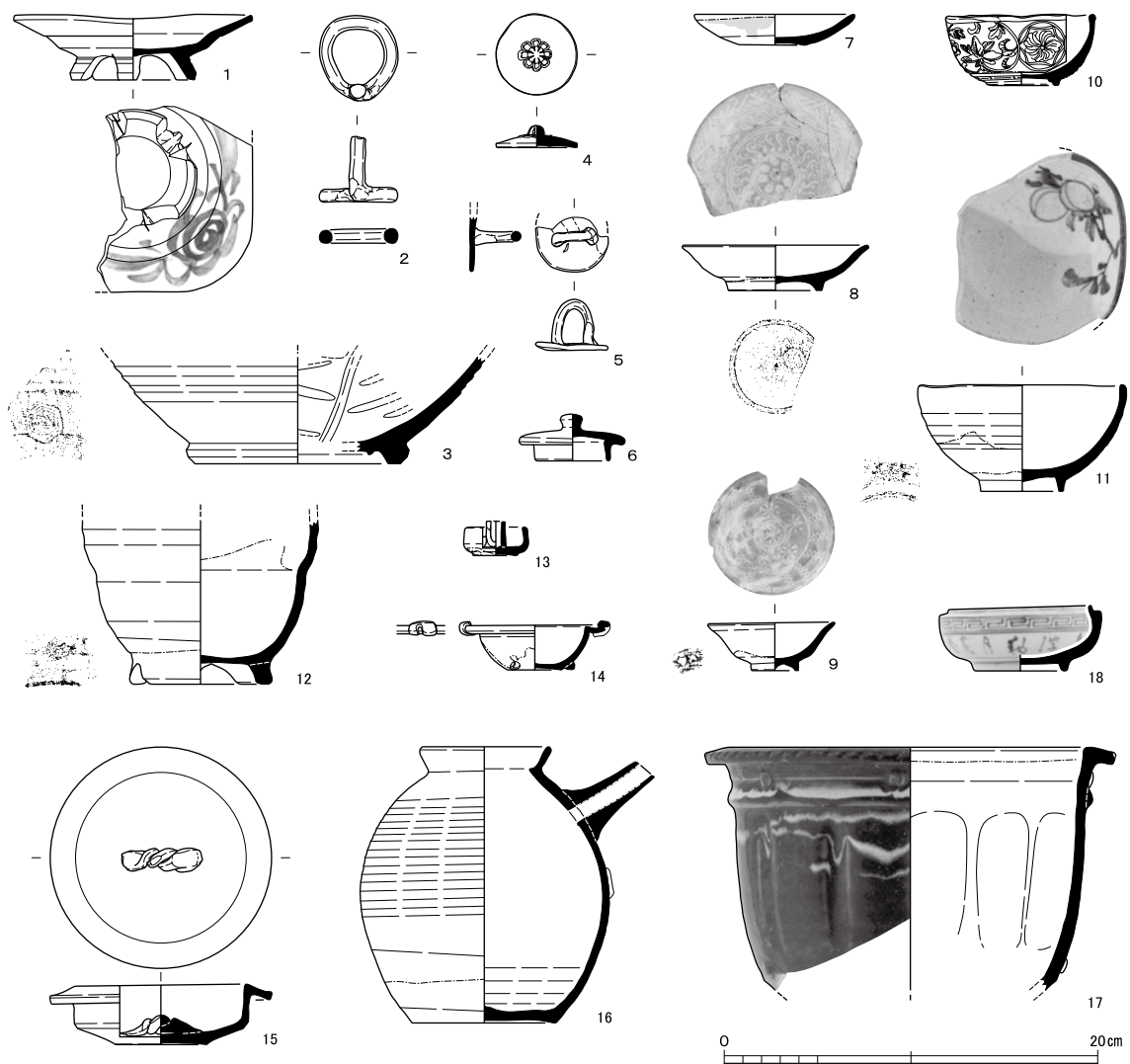


図10 土器類実測図（1：4）

掛けした部分に錆絵で枝と葉、呉須で木の実（桃）を描く。口縁端部は鉄釉が掛けられ口紅状を呈する。ロクロ成形で、体部下半と底部は回転ヘラケズリを施す。体部と高台の境に「旭亭」の刻印がある。亀屋旭亭の作品と考えられる。12は壺である。高台には3箇所山形の切欠きがある。本体をロクロ成形した後に高台は貼り付けている。体部内面下半・高台は無釉である。体部下半に「二重六角の中に清」が刻印されている。

13～17は鉄釉の施釉陶器である。13は燈火具のタンコロである。底部・体部下半を除いて鉄釉がかかる。ロクロ成形で、底部は回転ヘラケズリを施す。14はミニチュアの鉄釉鍋である。口縁部はほぼ水平に外方に開き、口縁端部は短く内側に突出し、断面は三角形になる。口縁部の対称位置2箇所に、ツマミ状の把手が付く。底部下半の3箇所に円錐形の脚が付く。ロクロ成形で、体部と底部は回転ヘラケズリを施す。15は皿型の土瓶の蓋である。直立した体部から口縁部が直線的に下方に屈曲する。中央に練り紐状のツマミがつく。上面に鉄釉がかかる。ロクロ成形で、底部は回転ヘラケズリを施す。底部に3箇所目跡が残る。16は長胴の汁次で、体部外面と内部に鉄釉がかかる。ロクロ成形であるが、体部下半と底部は回転ヘラケズリを施す。17は植木鉢である。体部から外下方に口縁部が屈曲する。口縁端部上方に刻み目が入る。口縁部と体部の境目に断面三角形の凸帯がめぐる。凸帯の上方と体部下面に円形の付文が貼り付けられている。体部には縦方向の凹みを入れる。体部下半を除く外面に鉄釉がかかり、一部線状に白色の釉が描かれる。ロクロ成形である。

染付磁器 (18) 蓋物の身である。蓋受け部と高台端部は無釉である。体部上面に雷文が描かれ、下部に漢字が書かれる。書かれた文字は「疎影横斜水清浅/暗香浮动月黄昏」の14文字で、北宋の詩人の林逋（林和靖）の七言律詩「山園小梅」の第3・4句である。

（3）窯道具（図11～13、図版7・8、表5）

匣鉢（図11・12、図版7・8 19～31） 26～31は井野祝峰窯で使用された伝世品である。匣鉢は大きく分けて2種に分類される。19～22は大型で器壁が厚く、体部に沈線が廻らないもの。窯印は、刻印を用いる。底部を粘土板で成形、上に体部を接合している。接合部内面に粘土を継ぎ足して補強している。25～31は小型で器壁が薄く、体部に沈線が廻るもの。窯印は、鉄釉で筆書きする。いわゆる一点ものを焼成するための匣鉢である。23・24は中間形態で基本的には大型品の特徴を踏襲するが、器壁が薄くなる。

形態は丸形、角形、小判形、口縁の一部が片口状になったものがある。底部には、平底のものと底部が下方に突出した丸底がある。また、底部に円孔が開く匣鉢（25・26）、底部がない筒形の匣鉢（31）がある。丸底の匣鉢は椀焼成用、片口の匣鉢は急須・土瓶・行平鍋などの突出した注口・把手をもった製品を焼くのに使用されたと考えられる。

19・20は、丸形平底の匣鉢である。19は器壁を切り取って窓をつけたもので、窓の反対側に半円状の空気穴をもち、底部側面に刻みがはいる。底部内面・体部は回転を利用したナデ調整を施す、20の底部は無調整、19は底部の外縁部はナデ調整を行うが、中心部は無調整で一部に藁の圧

痕が残る。20は「山形の下に大」、19は「#」を刻印する。21は角形平底の匣鉢である。体部と底部内面および体部との接合部はナデ調整、底部は無調整で作業台の圧痕が残る。器高は低い。22は小判形平底の匣鉢である。体部と底部ともナデ調整。器高は低い。20～22は口縁部に白泥を塗り、「より土」を置いた痕跡が認められる。19の底部には他の匣鉢の溶着の痕跡が認められる。

23は小判形平底の匣鉢である。体部と底部内面は体部との接合部はナデ調整、底部は無調整で作業台の圧痕が残る。器高は低い。外面に「丸の中に治」が刻印されている。

24は底部の外縁部はナデ調整を行うが、中心部は無調整で一部に藁の圧痕が残る。底部側面に刻みがいり、体部外面に「○」を刻印する。

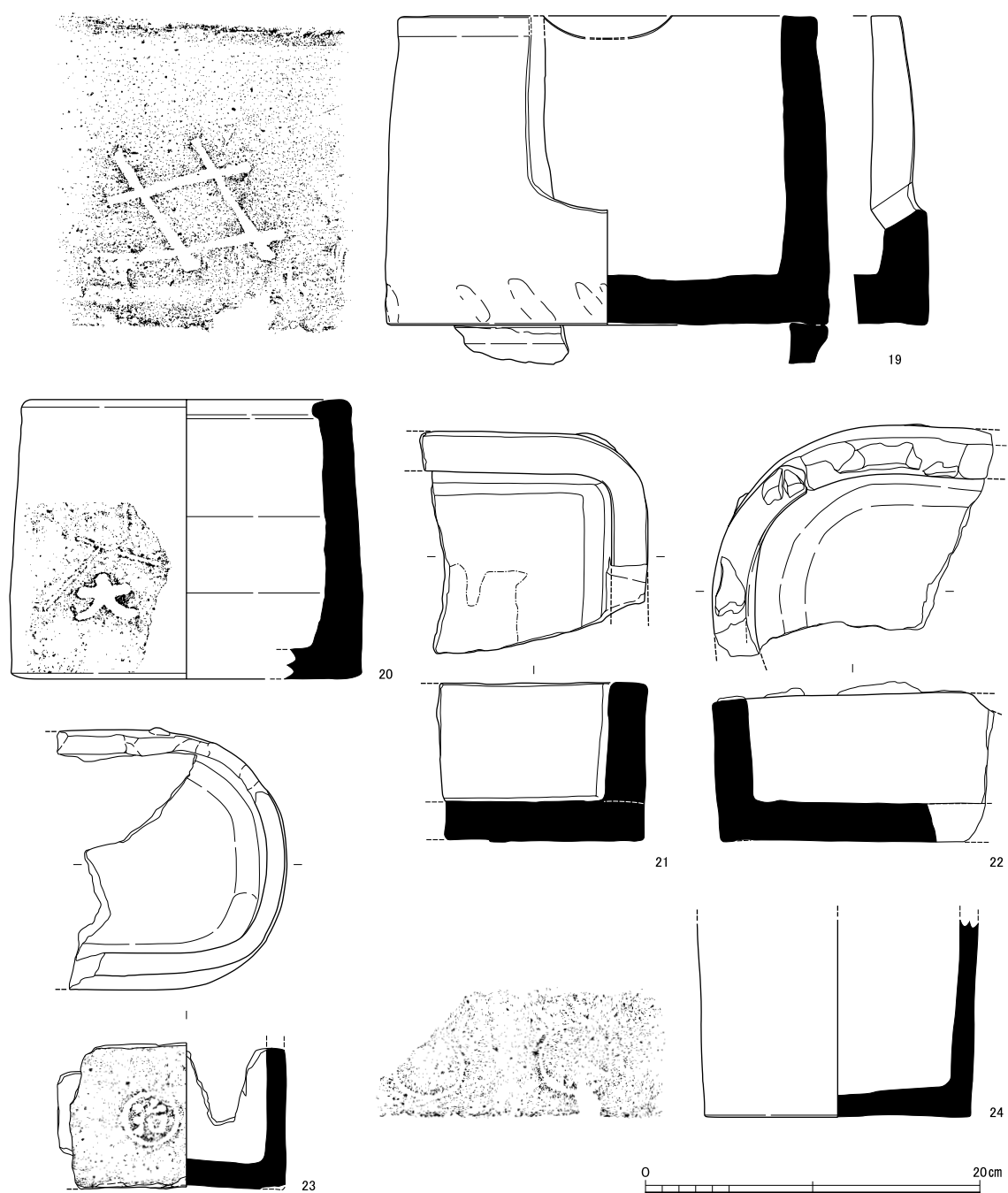


図11 匣鉢実測図1 (1 : 4)

25・26は丸型平底穴開き匣鉢である。体部は回転を利用したナデ調整の後外面に3条の沈線をめぐらす。底部はケズリ調整を行う。26は底部内面に布目痕が残る。27は円形平底匣鉢で、底部内面に布目痕が残る、体部は回転を利用したナデ調整の後外面に6条の沈線をめぐらす。底部はナデ調整を行う。体部外面に「祝峰」を2箇所、内面に「井ノ」と鉄釉で書かれている。28・29は丸形丸底の匣鉢である。突出した丸底の外面に布目痕と布の絞痕が認められる。内面は回転を利用したナデ調整を施すが、他は無調整である。体部外面に28は4条、29は7条の沈線をめぐらす。28は丸底側面に染付の小型碗の破片が融着している。体部外面に鉄釉で「井乃祝峰」、内面に「井ノ」と書かれている。29は体部内面に「祝峰」、底部外面に「祝」と鉄釉で書かれている。30は角形平底の匣鉢で、鉄釉で体部内面に2箇所「井能」と書かれている。体部と底部内面の外辺部はナデ調整、他は無調整である。31は筒形の匣鉢で、体部は回転を利用したナデ調整の後に外面に11条の

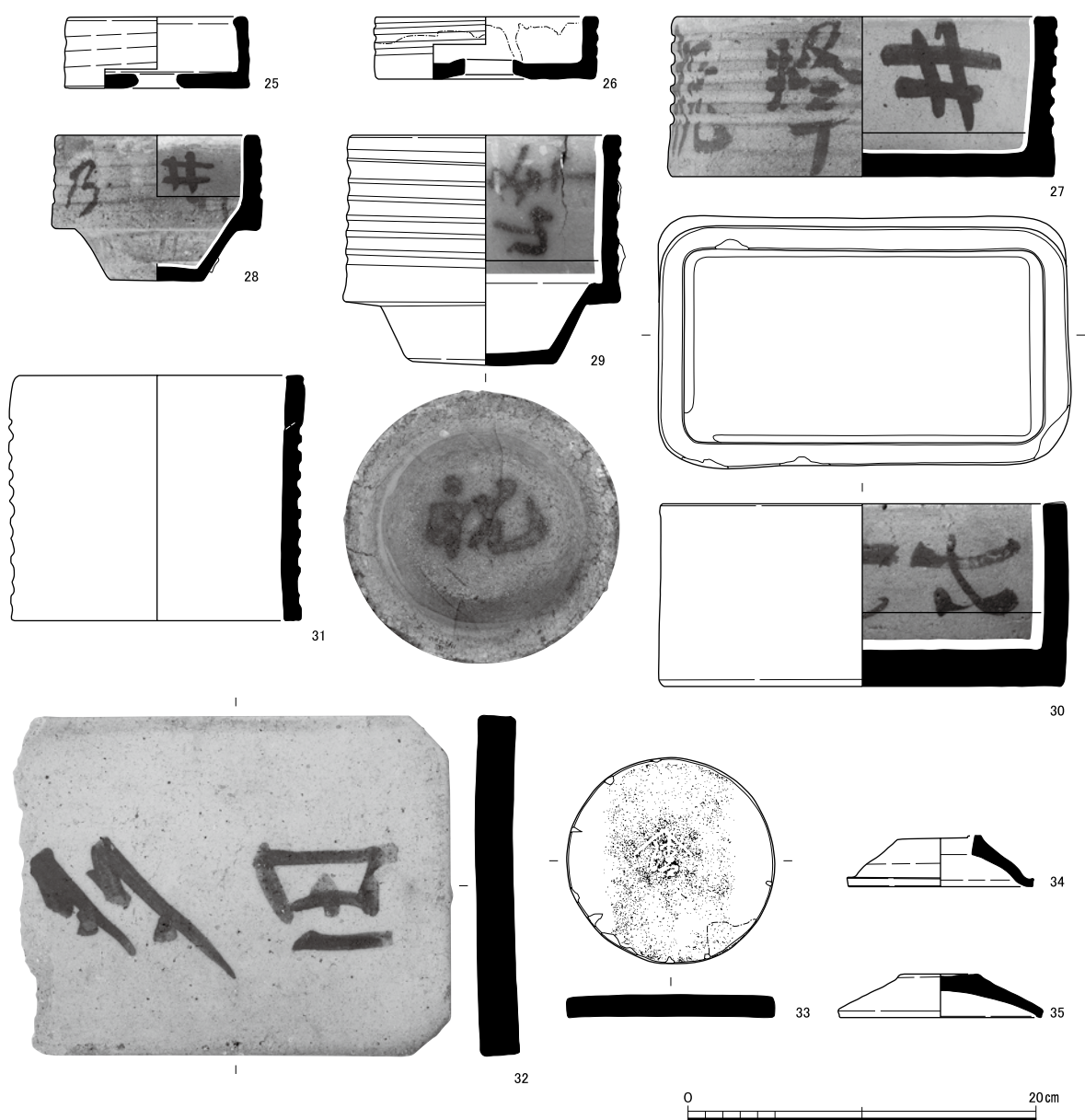


図12 匣鉢実測図2 (1:4)

沈線をめぐらす。筒部の下端部は、器壁に平行に刷毛調整が施される。外面に「井野」、内面に「井ノ」と鉄釉で書かれている。25～31は口縁部に白泥を塗り、30は「より土」を置く。28・29は型押し成形の後、内面をナデ調整したものである。他のものは、布で包まれた型に粘土を巻き付けて成形したのではないかと考えられる。

匣鉢蓋（図12、図版7 32～35） 32は四隅が切り取られた角形で、上面に鉄釉で「多田」と書かれている。型による成形で、上面と側面はナデ調整を施す。34・35は笠形の蓋である。ロクロ成形で、体部上半と天井部は回転ヘラケズリを施す。34の天井部は孔が開けられている。33は丸形の蓋で、「山形の下に清」と刻印されている。型成形の後に、ナデ調整を施す。32は鉄釉で文字が書かれているので、小型で薄型の匣鉢とセットなり、刻印のある33は粘土板成形の匣鉢の蓋として用いられたと考えられる。

輪トチン（図13、図版8 36～40） 36は小判形の中に「右^{六カ}」が陽刻・逆字で刻印されている。37は中型の輪トチンで、上部に輪状の製品痕跡が付く。38は幅広の扁平な輪トチンで、上面に白泥がかかる。完形ではないが復元すると、39は張ピンが5箇所、40は張ピンが3箇所付く。40は内側に高くなり、孔は上から下に狭くなって断面台形を呈する。

円盤状ハマ（図13、図版8 41～45） 41と42はほぼ同大であるが、41は薄型である。43は断面逆台形を呈する。44は張ピンが3箇所付く。上下両面とも糸切り痕があり、粘土から糸切りで切り離して成形している。上面には高台の痕跡が残っている。45は大型の泥メンコを再利用したもので三足の張ピンが付く。小判形の中に「右^{六カ}」が陰刻・正字で刻印されている。36と45はもともと

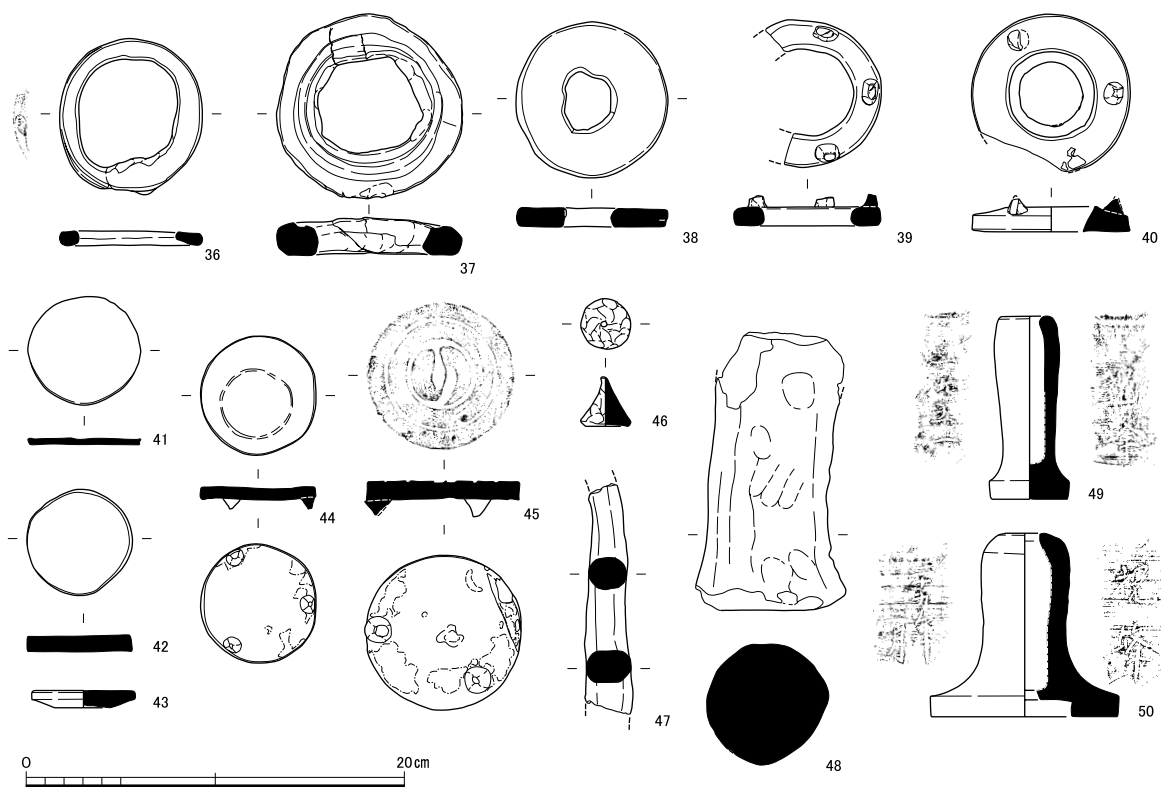


図13 窯道具実測図（1：4）

と同じ落款だと考えられるが、45は落款印を直接押されたもの、36は落款を押された製品から再押印されたものと思われる。

円錐ピン（図13、図版8 46） 手捏ね成形の円錐形のピンである。

棒状トチン（図13、図版8 47） 棒状のトチンで、断面は楕円形を呈する。両端は欠損している。

ツク（図13、図版8 48） 窯内の棚板を支える支柱である。円柱状で、表面は被熱によってガラス化し、上部が特に激しく被熱しており表面が剥離している。

シッタ（図13、図版8 49・50） 水挽き後ある程度乾燥した作品を伏せて高台などを削り出すための道具・シッタである。ロクロ成形で、体部は中空である。49は「祝峰」・「一九五一」、50には「祝峰」・「二九年 三月」と縦方向に対称側面に線刻されている。

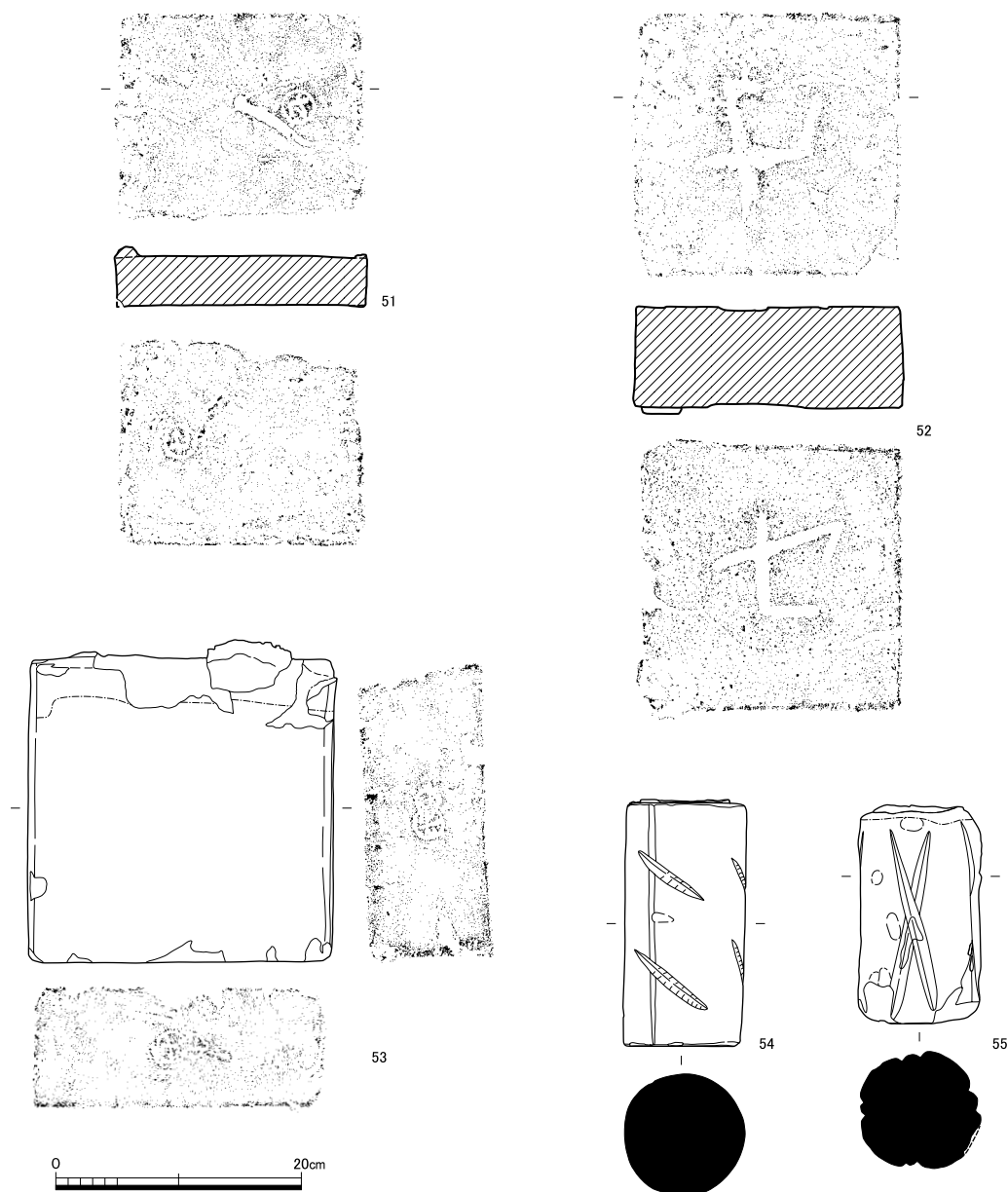


図14 塼（レンガ）・クレ拓影及び実測図（1：6）

(4) 窯壁材（図14・15、図版7、表5）

塼（レンガ）（図14、図版7 51～53） 窯の壁材として使用されたものである。51は両平面に「丸の中にセ」と刻印されたもので、一辺20.6cmの方形になると思われる。型による成形で、上面はナデ調整を施す。他の塼（レンガ）に比べて厚さが半分以下なので、棚板を再利用した可能性がある。52は両平面に「セ」と線刻されたもので、一辺22.0cmの方形である。何度も焼成されたため、亀裂が多数入る。型による成形で、上面と側面はナデ調整を施す。下面は外縁部のみナデ調整を施す。53は方形の塼で、側面2箇所に「瓢形の中に清七」と刻印されている。型による成形で、一部板状工具によるナデ調整の跡が残る。

クレ（図14、図版7 54・55） 京式登り窯に使用される円筒形の天井構築材である。粘土との結束を良くするために、54では上下二段の斜めの切込み、55は「×」の切込みをそれぞれ4箇所に入れている。型作りで、表面をナデ調整している。

耐火レンガ（図15 56～61） 窯の壁材として使用されたもので、主に旧窯に使用されたものである。型押し成形もしくはプレス成形によって製造されたものと思われる。56は両平面に格子文が押印され、片方に「BIZEN-INBE」と刻印されている。岡山県備前市で製造されたものである。57は「SK28 三石耐火煉瓦株式會社」と刻印されたもので、両平面に格子文が押印され、片方に文字が刻印されている。岡山県備前市の会社の製品である。58は「OMEIJI」とJIの上に「A?」と刻印されたものである。59は「⊕NI KTR」と刻印されたもので、九州耐火煉瓦株式会社の製品である。60は両平面に「△」が刻印されたものである。成形後板状の工具でナデ調整を行う。61は「OK」と刻印されたものである。

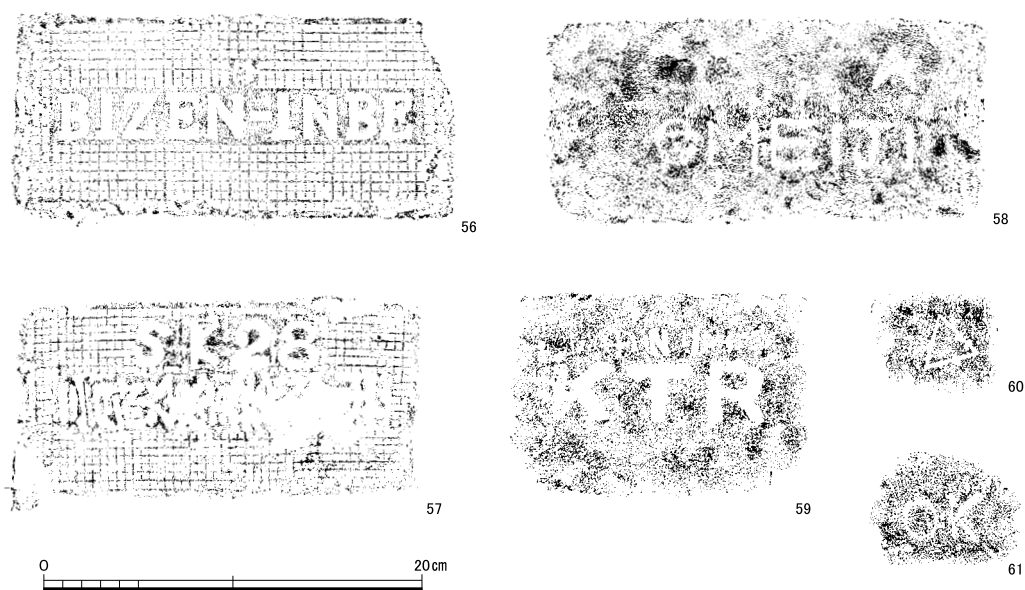


図15 耐火レンガ拓影（1：4）

(5) その他の遺物 (図16、図版7、表6)

軒丸瓦 (62・63) 桐文軒丸瓦で、下半部の葉のみの残存である。63の裏面はナデ調整で、周辺に指オサエの跡が残る。接合面に斜め方向のカキメがあるが、丸瓦を接合した痕跡は見当たらない。

土製品 (64～67) 64は鳩の土人形である。型作りで体部は中空で、中に土玉が入っており、音が鳴るようになっている。

65は粘土板の上面に円錐形の穴が整然と並んでいる。全体は滑らかに磨かれている。張ピンの成形型の可能性が考えられる。

66は土型である、合子の蓋を製作した型の可能性が考えられる。手捏ね成形で、内面に白泥がかかる。土型には他に土人形の牛・魚の抜き型、碗の打ち込み型などがある。また、施釉陶器10に類似した碗の押し型の破片も検出している。

67は電線などの電導体を絶縁し固定するのに使われる碍子である。酸化炎焼成されたもので、釉薬をかける前の器地である。井野祝峰窯で焼成されたものと考えられる。

木製品 (68) 叩き板である。片面に墨書された漢字「峰」の傍の下部が残っており、井野祝峰窯で使用されていた棧板を再利用したものと思われる。

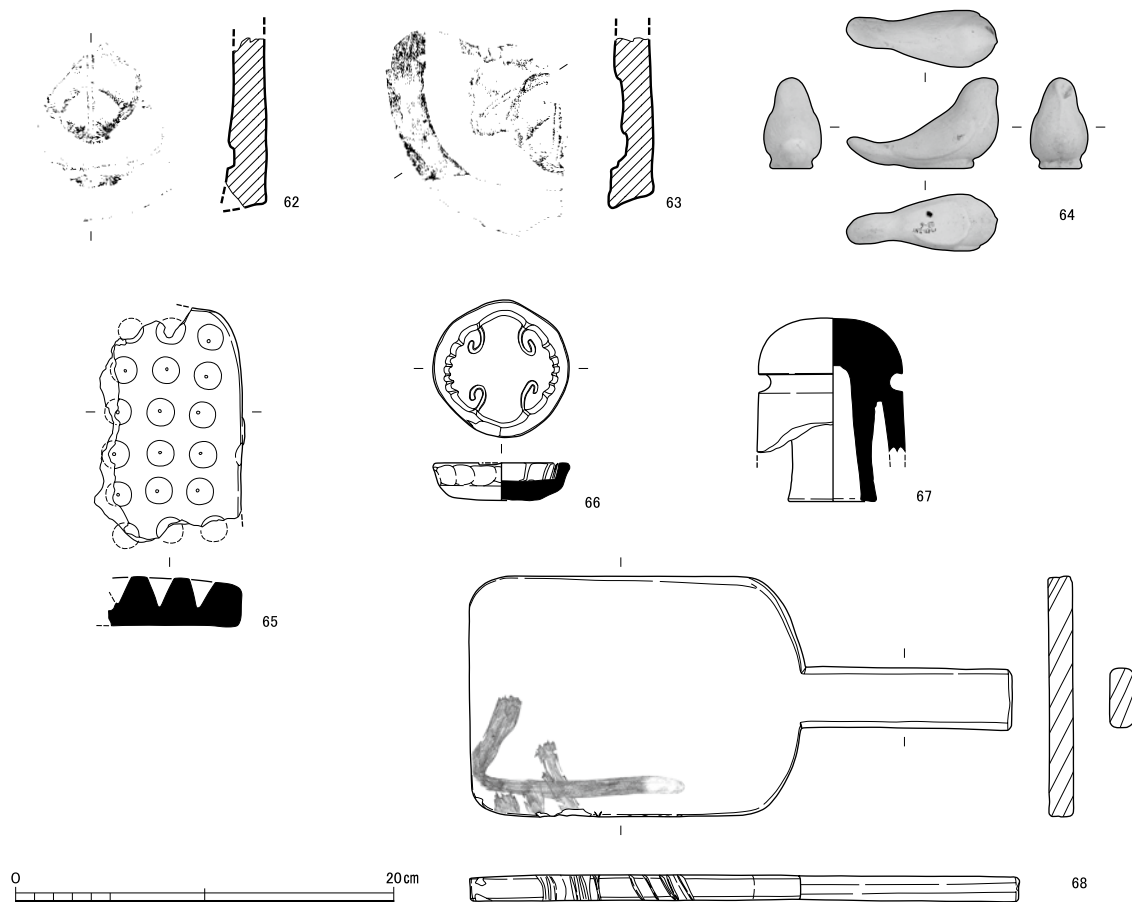


図16 その他の遺物実測図 (1 : 4)

(6) 刻印 (図17、表7)

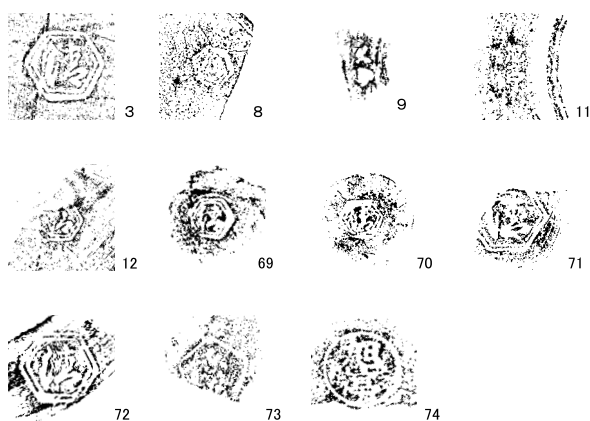
土器に押された刻印 (3・8・9・11・12・69～74) 69～72は「二重六角の中に清」の刻印で、清水六兵衛のものである。71は施釉陶器の椀で、底部に刻印されている。他は土師質土器の椀で、72は体部下半、他は底部に刻印されている。73は「五角形の中に東左」の刻印で、澤村東左の落款である。土師質土器の椀の底部に刻印されている。74は「丸の中に旭亭」の刻印で、亀屋旭亭の落款である。施釉陶器の筒形椀の体部下半に刻印されている。

窯道具に押された刻印 (23・33・36・45・75) 75は「丸の中に四ツ目菱」の刻印で、匣鉢の側面に刻印されている。

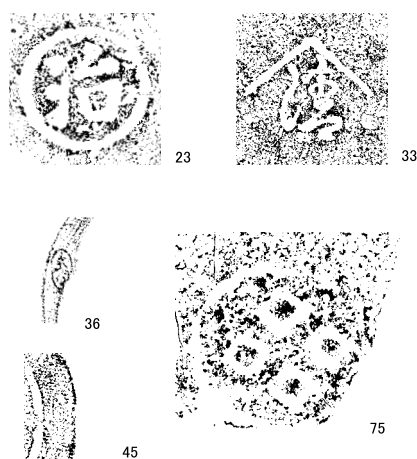
塼 (レンガ) に押された刻印 (51・53・76～79) 76は側面に「丸の中に宗」と刻印されたものである。77は側面に「山形の下に清」と刻印されたものである。78は側面に「山形の下に七」と刻印されたものである。79は平面に「矩形の中に福七」と刻印されたものである。

なお、既述の刻印については説明を省いた。

土器類



窯道具



塼 (レンガ)

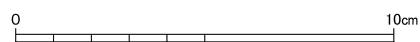
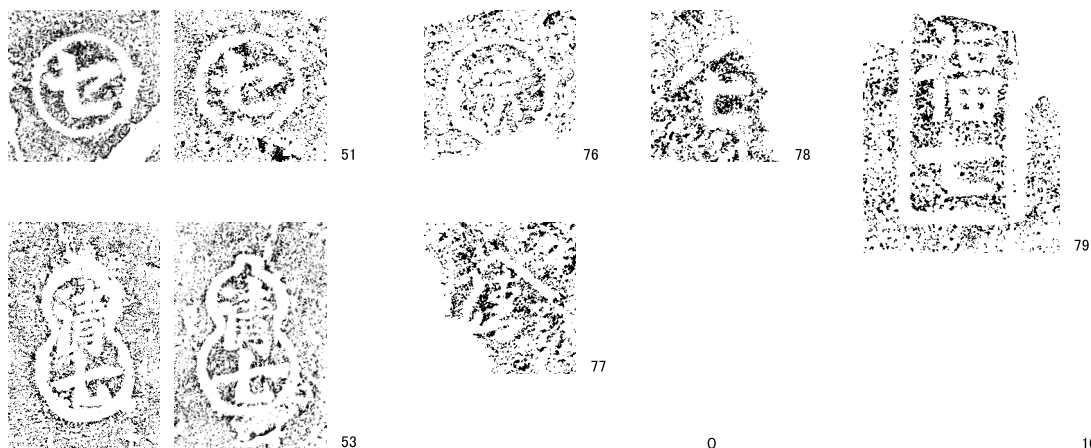


図17 刻印拓影 (1 : 2)

5. ま と め

今回の調査で、井野祝峰窯の変遷を解明することができた。二代目清水六兵衛の長男である清水七兵衛によって築かれた窯は、旧音羽川の北岸の比較的起伏の少ない地に、流れと平行に築かれている。そのため、登り窯を築造するのに傾斜地を造る必要があり、大規模な造成工事が行われたと考えられる。焚口（胴木間）が西に築かれているため、造成土の堆積は東にいくほど厚くなる。造成土から出土する遺物は江戸時代後期から幕末のもので、二代目清水六兵衛の銘款が刻印されたものがある。近くで操業した二代目清水六兵衛窯の廃棄物も造成に使用されたと考えられる。しかし、当初の窯本体は検出することはできなかった。この窯は、明治時代になっても使用されていたと考えられる。

大正窯は、胴木間の部分は造成土の上で一旦整地されているが、調査区2（四の間）では整地土は検出されなかった。基底部のみの検出であるが、基底部に使用されている磚（レンガ）は、大正窯以前の窯壁を再利用したもので、表面は高熱により緑色にガラス化している。方形の磚（レンガ）を平積みしたものが2～4枚溶結したものを一つのブロックとして使用している。大正窯四の間前隔壁の最下段は、レンガが縦になるように揃えて据えてある。上段はレンガブロックを小口積みと平積みを併用して構築されている。その上に薄い磚（レンガ）を平積みに上部に窯壁を構築していたと考えられる。基底部に使用された磚（レンガ）には、「山型に清」、「山型に七」、「瓢形の中に清七」の刻印が多くみられる。「清七」・「清」・「七」は清水七兵衛に係る可能性がある。その場合、清水七兵衛の築いた窯は完全に取り壊され、その窯壁を大正窯の基底部に使用したと考えられる。

表3 窯の寸法表

		旧窯	大正窯	大正採寸値
胴木間	幅(cm)			461
	奥行(cm)	(108)	(108)	
一の間	幅(cm)		492	461
	奥行(cm)	105	105	115
二の間	幅(cm)		465	461
	奥行(cm)	95	95	121
三の間	幅(cm)	435	465	467
	奥行(cm)	128	128	114
四の間	幅(cm)	440	477	470
	奥行(cm)	115	115	123
五の間	幅(cm)	435	487	442
	奥行(cm)	123	123	124
六の間	幅(cm)			427
	奥行(cm)	128	128	121
七の間	幅(cm)			397
	奥行(cm)	117	117	118

れる。

旧窯も大正窯の窯壁を取り壊した後にその基底部の上から再構築されていることが明らかになった。その際、大正窯のレンガを再利用したものと思われる。基底部の上に「BIZEN-INBE」と刻印された耐火レンガが小口平積みされている。大正窯より北側が約0.3m縮小している。

新窯は、南・北側ともに縮小されていることがわかった。また、胴木間から三の間までは新しく作り直しているが、三の間奥隔壁からは旧窯の奥隔壁を残して利用している。

出土遺物に関しては、匣鉢には大きく分けて、2種類あることがわかった。1種は粘土板成形で器壁が厚く、刻印をもつもの。他

は型成形で薄手、外面に沈線が廻り、鉄釉で文字を書くものである。後者は「井野」・「祝峰窯」と書かれているから、少なくとも昭和まで使用されたものである。前者は幕末の造成土から出土しているの、前者より古いものである。

土師質土器の中には、同形・同大の施釉陶器が多く存在する。これらは、釉を施す前の施釉陶器の器地であると考えられる。したがって、施釉陶器は先ず器地を焼成してから、施釉・絵付けが行われて再度焼成されたと思われる。伝統的な京式登り窯では、一・二の間では還元炎焼成で磁器、三・四の間では中性炎焼成で陶器、五の間以降は酸化炎焼成で土もの・土師質土器を焼成していた。施釉陶器の器地と考えられる土師質土器は、登り窯の後ろの焼成室で焼かれていた可能性が考えられる。

造成土から出土する土器類は器種・器形とも豊富で、土人形なども焼成している。いわゆる高級品だけではなく、多くの種類の日常雑器を生産していることもわかった。また、清水六兵衛の刻印以外に亀屋旭亭、澤村東左の刻印が一緒に出土しているのは、当窯が共同窯（寄り合い窯）として使用されたことを物語っている。

調査および報告書の作成にあたり、下記の方々の協力を得た。記して謝意を申し上げます。

八代目清水六兵衛氏、木立雅朗氏（立命館大学）、畑中英二氏（京都市立芸術大学）。

参考文献

- 1 陶器全集刊行会『日本古陶銘款集 京都・補遺篇』 平安堂書店 1973年
- 2 黒田和哉『茶碗 窯別銘款』 株式会社グラフィック社 1999年
- 3 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター『瀬戸大窯とその時代』 2001年
- 4 立命館大学21世紀COE 京都アート・エンタテインメント創成研究、近世京都手工業生産プロジェクト『京焼と登り窯－伝統工芸を支えてきたもの－』 2006年
- 5 立命館大学文学部考古学コース、立命館大学21世紀COE 京都アート・エンタテインメント創成研究『道仙化学製陶所跡－知られざる京焼・科学陶器窯跡の発掘調査－』 2006年
- 6 米田浩之・木立雅朗「道仙化学製陶所窯跡第5次発掘調査成果報告」『立命館文学』627号 2012年
- 7 京都市『元藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究 報告書』 2015年
- 8 立命館大学文学部歴史考古学ゼミ、京式登り窯の会 祝峰窯、京都女子大学前崎信也研究会『五条坂の登り窯－井野祝峰窯の歴史－』 2015年
- 9 立命館大学文学部歴史考古学ゼミ『井野祝峰窯－発掘調査現地説明会資料』 2015年
- 10 立命館大学文学部考古学文化遺産専攻『近現代登り窯の発掘調査－京都市井野祝峰窯・奈良市赤膚山元窯の事例－』 2016年
- 11 陶点晴かわさき、立命館大学文学部考古学・遺産専攻、立命館大学アート・リサーチセンター『五条坂に残る京焼登り窯－写真と映像展－』 2016年
- 12 木立雅朗「京都の土と窯－発掘現場からみた伝統工芸と京都の土と石の関係－」『立命館文学』649号 2017年

表4 土器類観察表

No.	器種	器形	調査区	遺構・層名	法量(cm)			釉の色調	色調	備考
					口径	器高	底径			
1	土師質土器	台付角皿	調査区2	第Ⅲ層	12.6	3.5	6.6		浅黄橙色	釉で下絵
2	土師質土器	灯火具(芯抑え)	調査区1	第Ⅲ層	4.2	3.5			灰白色	
3	土師質土器	鉢	調査区2	窯外整地土		(5.7)	11.0		浅黄橙色	「二重六角の中に清」を刻印
4	土師質土器	急須 蓋	調査区1	第Ⅲ層	4.4	1.2			にぶい黄橙色	型成形
5	施釉陶器	蓋	調査区1	第Ⅰ層	3.9	2.7			灰色	
6	施釉陶器	急須 蓋	調査区1	第Ⅰ層	3.8	2.5		にぶい黄橙色	橙色	天井部に施釉
7	施釉陶器	灯明皿	調査区1	第Ⅰ層	8.4	1.7	3.5	浅黄色	灰白色	
8	施釉陶器	皿	調査区2	窯外整地土	9.9	2.5	5.0	灰白色	にぶい黄橙色	三島手、 「二重六角の中に清」を刻印
9	施釉陶器	椀	調査区2	窯外整地土	6.7	2.6	2.6	白色	灰白色	三島手、刻印入り
10	施釉陶器	椀	調査区2	第Ⅰ層	7.9	3.8	3.6	にぶい赤褐色	橙色	型成形
11	施釉陶器	椀	調査区2	第Ⅲ層	10.5	5.7	4.4	灰白色	灰白色	「旭亭」を刻印
12	施釉陶器	壺	調査区2	第Ⅲ層		(8.8)	7.2	灰白色	にぶい橙色	「二重六角の中に清」を刻印
13	施釉陶器	灯火具	調査区2	窯外整地土	2.7	1.8	2.4	褐色	浅黄橙色	鉄釉、タンコロ
14	施釉陶器	鍋	調査区2	第Ⅲ層	7.3	2.6	2.9	暗褐色	灰白色	鉄釉
15	施釉陶器	蓋	調査区2	第Ⅲ層	11.7	3.2	4.8	暗赤褐色	にぶい橙色	鉄釉
16	施釉陶器	汁次	調査区1	第Ⅰ層	6.7	14.8	7.8	褐色	にぶい橙色	鉄釉
17	施釉陶器	植木鉢	調査区2	第Ⅲ層	19.4	(13.0)		暗褐色	にぶい黄橙色	
18	染付磁器	蓋物 身	調査区1	第Ⅰ層	8.6	3.5	4.9		白色	

表5 窯業関連遺物観察表

No.	器種	器形	調査区	遺構・層名	法量(cm)			色調	備考
					長さ	幅(径)	厚さ(高さ)		
19	窯道具	匣鉢	調査区2	第Ⅲ層	24.8	26.4	18.5	灰白色	胴部に刻印
20	窯道具	匣鉢	調査区1	第Ⅰ層	18.6	20.8	16.7	にぶい赤褐色	「山形の下に大」を刻印
21	窯道具	匣鉢	調査区1	第Ⅱ層	(13.3)	(13.7)	9.5	にぶい黄橙色	角形平底
22	窯道具	匣鉢	調査区1	第Ⅱ層	(16.8)	(13.9)	9.6	にぶい橙色	小判形平底
23	窯道具	匣鉢	調査区2	窯外整地土	(13.8)	15.5	(8.8)	灰白色	「丸の中に治」を刻印
24	窯道具	匣鉢	調査区1	第Ⅱ層		(11.8)	15.8	にぶい橙色	○を刻印
25	窯道具	匣鉢	調査区1	第Ⅰ層	口径8.1	底径10.4	4.1	灰白色	穴開き
26	窯道具	匣鉢	伝世品		口径12.6	底径12.4	3.6	明褐色	穴開き
27	窯道具	匣鉢	伝世品		口径21.6	底径21.8	9.2	明黄褐色	「井ノ」・「祝峰」銘
28	窯道具	匣鉢	伝世品		口径11.5	底径5.3	8.4	明黄褐色	「井ノ(乃)祝峰」銘
29	窯道具	匣鉢	伝世品		口径15.3	底径8.1	13.3	にぶい黄橙色	「祝峰」・「祝」銘

No.	器種	器形	調査区	遺構・層名	法量(cm)			色調	備考
					長さ	幅(径)	高さ(高さ)		
30	窯道具	匣鉢	伝世品		23.7	14.1	10.5	黄橙色	「井能」銘
31	窯道具	匣鉢	伝世品			16.4	14.1	にぶい黄褐色	「井ノ」銘
32	窯道具	匣鉢蓋	調査区2	床面	(25.2)	19.7	2.6	浅黄橙色	「多田」銘
33	窯道具	匣鉢蓋	調査区2	第Ⅲ層	12.0	11.8	1.3	にぶい橙色	「山形の下に清」を刻印
34	窯道具	匣鉢蓋	調査区1	第Ⅱ層		3.0	10.5	にぶい黄褐色	
35	窯道具	匣鉢蓋	調査区2	第Ⅰ層			2.5	灰白色	
36	窯道具	輪トチン	調査区1	第Ⅲ層	4.6	4.2	3.5	褐灰色	刻印入り
37	窯道具	輪トチン	調査区2	第Ⅲ層		9.8	2.0	にぶい橙色	
38	窯道具	輪トチン	調査区1	第Ⅰ層	8.3	8.0	1.0	にぶい黄橙色	扁平
39	窯道具	輪トチン	調査区1	第Ⅰ層		7.6	1.7	にぶい黄橙色	張ピンが付く
40	窯道具	輪トチン	調査区1	第Ⅱ層		8.3	1.7	にぶい褐色	三足のピンが付く
41	窯道具	円盤状ハマ	調査区1	第Ⅰ層	6.0	5.7	0.4	灰白色	薄い
42	窯道具	円盤状ハマ	調査区1	第Ⅲ層		5.6	0.9	灰白色	手握ね、「小判型に右六？」を刻印
43	窯道具	円盤状ハマ	調査区1	第Ⅲ層		5.5	0.9	灰白色	断面逆台形
44	窯道具	円盤状ハマ	調査区2	第Ⅲ層	6.3	6.1	1.2	にぶい橙色	三足のピンが付く
45	窯道具	円盤状ハマ	調査区1	第Ⅲ層		8.3	1.9	にぶい橙色	泥メンコの再利用、三足のピンが付く、刻印入り
46	窯道具	円錐ピン	調査区2	第Ⅰ層		2.7	2.6	にぶい橙色	
47	窯道具	棒状のトチン	調査区1	第Ⅰ層	(12.2)	2.5	1.7	明赤褐色	
48	窯道具	ツク	調査区1	第Ⅰ層		14.7	6.4	にぶい橙色	
49	窯道具	シッタ	伝世品		上部径2.5	底径4.0	9.7	にぶい黄褐色	「祝峰」・「一九五一」と線刻
50	窯道具	シッタ	伝世品		上部径2.0	底径9.8	9.7	灰白色	「祝峰」・「二十九年 三月」と線刻
51	窯壁材	塼(レンガ)	調査区3	大正窯基底部	20.6	(17.3)	4.0	にぶい橙色	「丸の中にセ」を刻印
52	窯壁材	塼(レンガ)	旧窯二の間	北側壁	22.1	22.0	8.2	にぶい橙色	「セ」を線刻
53	窯壁材	塼(レンガ)	採集品		25.2	24.8	10.3	橙色	「瓢箪形の中に清七」を刻印
54	天井材	クレ	二の間	天井		9.9	20.1	灰白色	
55	天井材	クレ	二の間	天井		9.8	17.7	にぶい黄褐色	
56	窯壁材	耐火レンガ	旧窯四の間	奥隔壁基底部	23.8	11.1	6.3	白色	「BIZEN INBE」刻印
57	窯壁材	耐火レンガ	採集品		21.0	10.2	5.5	白色	「SK28 三石耐火煉瓦株式会社」を刻印
58	窯壁材	耐火レンガ	採集品		23.0	11.0	6.0	灰白色	「○MEIJI」とJIの上に「A」を刻印
59	窯壁材	耐火レンガ	採集品		22.5	10.9	7.2	浅黄橙色	「⊕NI KTR」を刻印
60	窯壁材	耐火レンガ	採集品		22.0	10.2	6.5	灰白色	「△」を刻印
61	窯壁材	耐火レンガ	採集品		22.5	10.9	7.5	にぶい黄褐色	「OK」を刻印

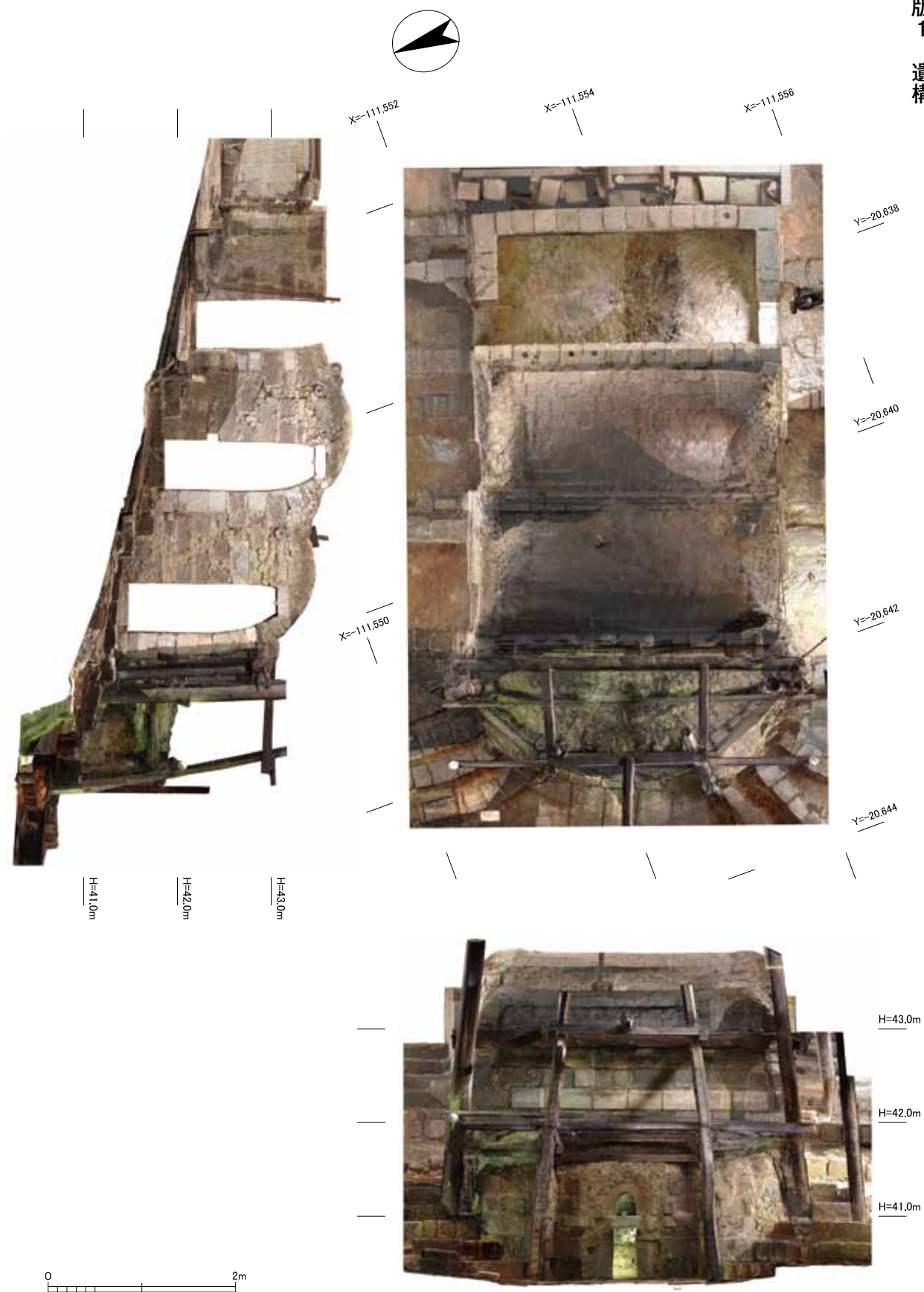
表6 その他の遺物観察表

No.	器種	器形	調査区	遺構・層名	法量(cm)			色調	備考
					長さ	幅(径)	高さ(高さ)		
62	瓦	軒丸瓦	調査区2	第Ⅲ層		(17.6)	2.2	にぶい橙色	桐文軒丸瓦
63	瓦	軒丸瓦	調査区2	第Ⅲ層		(17.6)	2.4	にぶい橙色	桐文軒丸瓦
64	土製品	土人形(鳩)	調査区1	第Ⅲ層	8.0	3.0	4.8	灰白色	
65	土製品	土型	調査区2	窯外整地土	(12.4)	(8.0)	2.7	浅黄橙色	ビンの成形型?
66	土製品	土型	調査区2	窯外整地土	7.3	7.2	2.0	にぶい黄橙色	
67	土製品	碁子	調査区2	床面		7.8	9.7	灰白色	酸化炎焼成
68	木製品	叩き板	伝世品		28.7	12.7	1.4	—	棧板の転用、墨書「峰」の一部が残る

表7 刻印観察表

No.	器種	器形	調査区	遺構・層名	法量(cm)			色調	備考
					長さ	幅(径)	高さ(高さ)		
69	土師質土器	椀	調査区2	窯外整地土	—	—	—	浅黄橙色	「二重六角の中に清」を刻印。
70	土師質土器	椀	調査区2	第Ⅲ層	—	—	—	浅黄橙色	「二重六角の中に清」を刻印。 内面に白色の釉?
71	施釉陶器	椀	調査区2	第Ⅱ層	—	—	—	にぶい褐色 釉:暗オリーブ灰色	「二重六角の中に清」を刻印。
72	土師質土器	椀	調査区2	第Ⅲ層	—	—	—	浅黄橙色	「二重六角の中に清」を刻印。 内外面に白色の釉?
73	施釉陶器	椀	調査区2	第Ⅲ層	—	—	—	にぶい黄橙色 釉:黄橙色	「五角の中に東左」を刻印。
74	土師質土器	椀	調査区2	床面	—	—	—	浅黄橙色	「丸の中に旭亭」を刻印。
75	窯道具	匣鉢	調査区1	第Ⅳ層	—	—	—	にぶい黄橙色	「丸の中に四ツ目菱」を刻印。
76	窯壁材	埴(レンガ)	採集品		20.0	20.0	4.0	にぶい黄橙色	「丸の中に宗」を刻印。
77	窯壁材	埴(レンガ)	大正窯 四の間	前隔壁基底部	(20.0)	(20.0)	(7.5)	灰白色	「山形の下に清」を刻印。
78	窯壁材	埴(レンガ)	大正窯 四の間	前隔壁基底部	(20.0)	(20.0)	(7.5)	灰白色	「山形の下に七」を刻印。
79	窯壁材	埴(レンガ)	調査区1	第Ⅰ層	20.0	(20.0)	9.8	灰白色	「矩形の中に福七」を刻印。

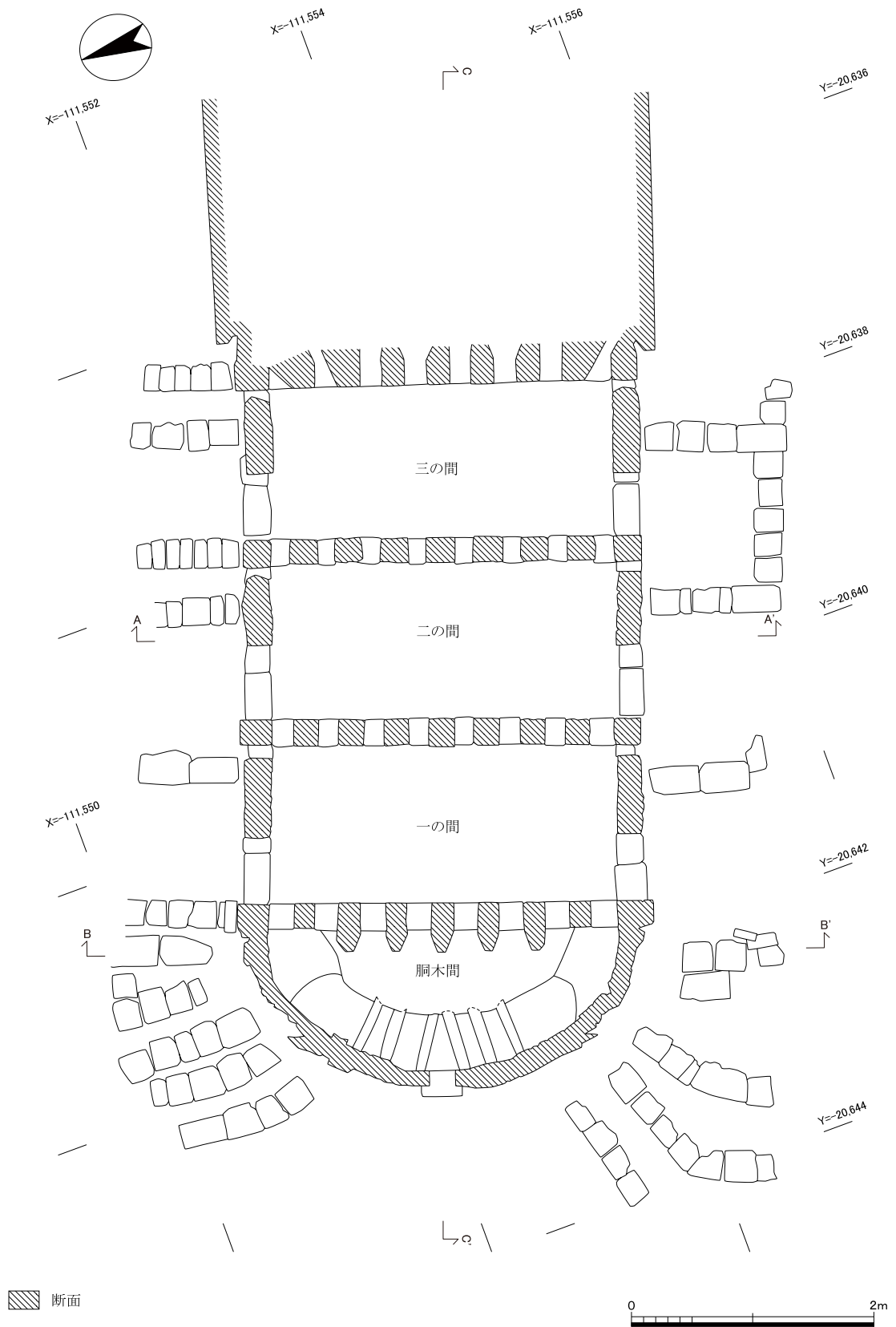
圖 版



新窯オルソ画像（1：60）



※A-A'、B-B'、C-C'は図版3に対応



※ A-A'、B-B'、C-C' は図版2に対応

新窯平面図（1：50）



1 新窯全景（西から）



2 旧窯・大正窯北側壁基底部（西から）



3 旧窯南側壁基底部（西から）



1 調査区1 全景（北から）



2 調査区2 全景（北から）



1 新窯三の間奥隔壁及び旧窯五の間奥隔壁（北西から）



2 大正窯四の間 奥隔壁基底部（北から）



3 大正窯胴木間 内部裾（東から）



4 大正窯四の間 前隔壁基底部上半（東から）



5 大正窯四の間 前隔壁基底部下半（西から）



窯道具・窯壁材・瓦・土製品・木製品



1 窯道具



2 井野祝峰窯伝世窯道具

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ろくはらせいちょうあと・きょうやきがまあと（いのしゅくほうがま）							
書 名	六波羅政庁跡・京焼窯跡（井野祝峰窯）							
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2017-12							
編 著 者 名	木下保明							
編 集 機 関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発 行 所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2018年5月31日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード 市町村遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ろくはらせいちょうあと 六波羅政庁跡 きょうやきがまあと 京焼窯跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 けんになじちょうごじょう 建仁寺町五条 さがるいつちようめひがしいる 下る一丁目東入 よしのちょう 芳野町	26100	540	34度 59分 39秒	135度 46分 26秒	2017年11月 21日～2017 年12月14日	80m ²	宿泊施設 新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
六波羅政庁跡 京焼窯跡	都城跡 邸宅跡 窯跡	江戸時代後期 ～幕末	清水七兵衛窯の造 成土		土師器、土師質土器、 瓦質土器、施釉陶器、 染付、磁器、土製品、 瓦、銭貨、窯道具、レ ンガ		京式登り窯の変遷 の一端を明らかに することができた。	
		明治40年 ～昭和24年	大正窯（清風与平 窯）		窯道具、レンガ、土製 品、木製品			
		昭和24年 ～昭和46年	旧窯（井野祝峰窯）					
		昭和46年～	新窯					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-12

六波羅政庁跡・京焼窯跡（井野祝峰窯）

発行日 2018年5月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961